

ネパール地震被害に対する 国際緊急援助隊救助チーム 活動報告書

平成28年2月
(2016年)

独立行政法人国際協力機構
国際緊急援助隊事務局

緊 援
J R
16-002

ネパール地震被害に対する 国際緊急援助隊救助チーム 活動報告書

平成28年2月
(2016年)

独立行政法人国際協力機構
国際緊急援助隊事務局

序 文

2015年4月25日ネパール連邦民主共和国時間11時56分に同国中部で発生した地震は、首都カトマンズをはじめ各地に甚大な被害を及ぼしました。

日本国政府はネパール連邦民主共和国政府からの要請を受け、JICA国際緊急援助隊救助チーム並びに医療チーム及び自衛隊部隊の派遣を決定し、被災者の救出と支援にあたりました。発災当日に支援要請を受け、JICAは翌26日に被災国に向けて救助チームを派遣しました。

救助チームはカトマンズに到着後、被災国政府、国連災害評価調整チーム及び各国の国際捜索救助チームと連携し、カトマンズ市内において迅速に活動を開始し、現地の警察関係者との共同作業を含め、8日間捜索救助活動を展開しました。残念ながら生存者の発見には至りませんでした。チームの献身的な活動にはネパール連邦民主共和国政府や市民から大きな感謝の念が示されました。

本報告書は同チームの活動内容を報告するものです。

今後、ネパール連邦民主共和国の一日も早い復旧・復興と被災者の暮らしの安定と幸福を心よりお祈りいたします。

平成28年2月

独立行政法人国際協力機構

理事 富吉 賢一

目 次

序 文
目 次
写 真
略語表

第1章 被災概要	1
1-1 被災状況	1
1-2 ネパール政府の対応	1
1-3 各国の救助支援概要	1
1-4 日本の対応	1
第2章 救助チーム派遣概要	3
2-1 派遣日程	3
2-2 チーム構成	3
第3章 活動報告	4
3-1 団 長	4
3-2 広報・記録	6
3-3 計画・情報分析	7
3-4 安全管理	8
3-5 連絡調整ロジ	11
3-5-1 連絡調整	11
3-5-2 ロジスティクス	12
3-6 医療班	14
3-7 中隊長	16
3-8 ハンドラー	17
3-9 構造評価	18
3-10 業務調整員	21
付属資料	
1. 活動日程	33
2. メンバーリスト	34
3. ネパール政府感謝状	37
4. 各国救助チーム活動地域（4月29日時点）	42
5. 活動日報	43
6. INSARAG Post Mission Report	68

写

真



搜索の様子（ハヌマン・ドカ）



アセスメントの様子（ハヌマン・ドカ）



救助犬による搜索（ハヌマン・ドカ）



削岩機でサーチングホールを作成
（ゴンガブ）



ビデオスコープを使った搜索（ゴンガブ）



傾斜角度を測る構造評価隊員（ゴンガブ）



情報収集（サクー）



遺体収容（ハヌマン・ドカ）



資機材の確認（エベレストホテル）



UCC 調整会議



現場指揮所（サクー）



宿泊先での資機材整備（エベレストホテル）

略 語 表

略 語	英 文	和 文
APF	Armed Police Force	武装警察
ASR	Assessment Search and Rescue	評価・模索・救助
BoO	Base of Operation	指揮本部拠点
FCSS	Field Coordination Support Section	フィールド調整支援課
FMT	Foreign Medical Teams	海外医療チーム
FOG	Field Operations Guide	フィールド・オペレーションズ・ガイド
IEC	INSARAG External Classification	INSARAG 外部評価
IER	INSARAG External Re-classification	INSARAG 外部再評価
INSARAG	International Search and Rescue Advisory Group	国際捜索救助諮問グループ
JDR	Japan Disaster Relief Team	国際緊急援助隊
JOCA	Japan Overseas Cooperative Association	青年海外協力協会
LEMA	Local Emergency Management Agency	現地災害対策本部
MNMCC	Multinational Military Coordination Center	多国軍調整センター
OSOCC	On-Site Operations Coordination Centre	現地活動調整センター
POA	Plan of Action	活動計画
PPE	Personal Protective Equipment	個人用防護具
RDC	Reception and Departure Centre	受入出発センター
ROAP	Regional Office for Asia and the Pacific	OCHA アジア太平洋地域事務所
TF	Task Force	タスク・フォース
TOR	Terms of Reference	タームズ・オブ・レファレンス
UCC	USAR (Urban Search And Rescue) Coordination Cell	国際捜索救助チーム調整セル
UNDAC	United Nations Disaster Assessment and Coordination	国連災害評価調整チーム
UNOCHA	United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs	国連人道問題調整事務所
USAR	Urban Search and Rescue	都市型捜索救助
USGS	United States Geological Survey	米国地質調査所
VOSOCC/VO	Virtual OSOCC	バーチャル OSOCC

第1章 被災概要

1-1 被災状況

2015年4月25日15時11分（日本時間）、ネパール連邦共和国（以下、「ネパール」と記す）中部ラムジュン郡において、マグニチュード7.8の地震が発生した。地震は近隣のインドやバングラデシュでも感じられ、その後もマグニチュード4以上の余震が続いた。被災状況は以下のとおり。

発生日時：2015年4月25日15時11分（日本時間）

震源地：ネパール中部ラムジュン郡（カトマンズから北西80km地点、ポカラから東60km）

被災状況：首都カトマンズをはじめとして、75のネパール地区のうち32の地区がインフラへの被害、家屋の倒壊、通信の不通等、地震による被害を受けた。

死者数：8,600名以上（5月27日時点、ネパール政府発表）

負傷者数：2万1,000名以上（5月27日時点、ネパール政府発表）

1-2 ネパール政府の対応

内務省が全体的な国内外支援の調整を担当し、捜索救助計画等については国家災害対策庁（National Emergency Operating Center）が担当。外国軍の支援受入れは、ネパール軍が多国軍調整センター（MNMCC）を設置し調整のリードをとった。保健・医療については保健人口省が外国チームの受入調整や国内病院の支援等、全面的に統括を行った。

1-3 各国の救助支援概要

政府やNGOを含め計76の救助チーム〔うち国際捜索救助諮問グループ（International Search and Rescue Advisory Group：INSARAG）認定18チーム〕が捜索・救助活動に参加。

1-4 日本の対応

ネパール政府の要請を受け、日本は国際緊急援助隊（Japan Disaster Relief Team：JDR）（救助チーム、医療チーム、自衛隊部隊）を派遣するとともに、緊急援助物資供与及び緊急無償資金協力を実施した。また、国連人道問題調整事務所（UNOCHA）からの要請に応じ、国連災害評価調整チーム（UNDAC）要員1名を派遣した。

(1) JDRの派遣

1) 救助チーム

派遣期間：4月26日～5月9日

派遣隊員数：70名

2) 医療チーム1次隊

派遣期間：4月28日～5月11日

派遣隊員数：46名

- 3) 医療チーム2次隊
派遣期間：5月7日～5月20日
派遣隊員数：34名

 - 4) 自衛隊部隊（医療援助隊）
派遣期間：4月29日～5月22日
派遣隊員数：約110名
- (2) 緊急援助物資供与
支援金額：約2,500万円（輸送費含む）
内容：テント350張、毛布2,500枚
- (3) 緊急無償資金協力
16.8億円（国際機関経由）
- (4) UNDAC派遣
派遣期間：4月26日～5月9日
派遣人数：1名

第2章 救助チーム派遣概要

2-1 派遣日程

2015年4月26日～5月9日（14日間）

※活動日程は付属資料1参照

<活動概要>

4月28日の現地入り以降、世界遺産にも登録されているカトマンズ市内の旧王宮ハヌマン・ドカ近辺、及び古都バクタプールなどでの捜索救助活動を実施。5月8日に現地を出発するまでに1体の遺体を収容。

2-2 チーム構成

計70名

- ・ 団長1名（外務省）
- ・ 副団長4名（警察庁1、消防庁1、海上保安庁1、JICA1）
- ・ メディカルマネジャー1名（医師）
- ・ 中隊長2名（警察庁1、消防庁1）
- ・ 中隊長サポート2名（警察庁1、消防庁1）
- ・ 小隊長4名（警察庁1、消防庁2、海上保安庁1）
- ・ 救助隊員36名（警察庁12、消防庁12、海上保安庁12）
- ・ 通信班2名（警察庁2）
- ・ ハンドラー5名（警察庁5）救助犬4頭
- ・ 医療班4名（医師2、看護師2）
- ・ 構造評価専門家2名
- ・ 業務調整員7名〔JICA4、青年海外協力協会（JOCA）3〕

※メンバーリストは付属資料2参照

第3章 活動報告

3-1 団 長

外務省国際協力局緊急・人道支援課 小林成信

2015年4月25日にネパールで発生したマグニチュード7.8の大地震は5月12日時点で死者が約8,000名にもものぼる甚大な被害をもたらしており、各国からの救援（救助チーム）も最大規模にのぼった。国連人道問題調整事務所（UNOCHA）によると、世界各国から総計76の救助チームが支援に駆けつけ、うち18チームが国際搜索救助諮問グループ（INSARAG）の評価を受けたチーム（「Heavy」及び「Medium」）であった。日本の国際緊急援助隊（JDR）は「Heavy」の評価を受けており、支援に訪れた救助チームのなかでもトップグループに位置する重要なチームであったといえる。

日本政府は、ネパール政府が支援要請を出した2時間後にはJDRの派遣を決定しており、迅速な派遣決定が行われた。JDRのネパールでの活動は、カトマンズ市内〔ダルバール広場とゴンガブ（Gongabu）地区〕及び郊外のサクーの3カ所の搜索・救助活動を軸に、国際搜索救助チーム調整セル（UCC）との協議を経て19セクター内のセクターK地区での搜索（ASR2）を実施した。これは国連による調整開始前にネパール政府よりの要請により、ダルバール広場での活動を開始しており、その後、セクターK内でのバクタプールなどの搜索後、サクーでの救助活動が開始され、さらに、ネパール政府よりの要請にてゴンガブ地区の搜索・救助活動が行われたとの経緯による。

このように搜索・救助活動を推進するに際し、ネパール政府及び国連双方との調整のうえに計画、情報分析を行ったが、最初の活動地決定については現地大使館及びJICA事務所による事前の打合せに依存した。国連災害評価調整チーム（UNDAC）にもJDR事務局からの職員が派遣され、かつ新たなINSARAGのガイドラインにより、UCCにリエゾンを派遣するなど、JDRの計画策定には国連他、国際社会との調整を積極的に推進した。なお、今次のような大災害において救助地の決定等については、多数の救助隊が救援に駆けつけるなかでの調整となるため容易ではなかった。

安全管理については、指揮本部、宿舍等がホテル内に置かれ、警備等が順調になされたものの、活動サイトでは現地警察等の能力に限界もあり、日本のチーム内での対処と現地警察等の協力を組み合わせる形で行い、事故等の問題を回避した。また、内外プレスに関心も高く、毎日1回以上の定例記者会見に加え、日本出発時から経由地、さらには遅延する飛行機機内も含め、マスコミからの照会には積極的に対応した。ロジ面では、特に、カトマンズ空港の混雑により、1日遅れてのネパール入国となり、かつその後も同空港の航空機受入制約から、資機材の到着が遅れ、ロジ関係者は、常時、資機材入手等に忙殺された。なお、救助機材を優先したがために、その他の資機材、食料等の輸送が遅れ、関係者は現地での食料調達にも奔走した。

各中隊、小隊、通信、救助犬チーム、医療、構造の各班とも、担当職務の遂行に全力を尽くし円滑な救助活動が行われた。実働部隊はほこりなどの舞うなかで、倒壊危険のある建物での救助活動を遂行し、通信班は宿舍屋上にアンテナを配置し市内の連絡を確保、救助犬は暑さとストレスのなかで点滴を受けつつハンドラーの手厚い対応にて業務を進めた。医療班は救助現場にては隊員の脱水症状回避に全力を尽くし、宿舍にあっては香辛料を抑えた食事の確保についても注意

を払うなど、隊員の健康管理を進め、活動中、病気、事故等を回避し、さらには派遣されている国連人道支援要員への支援も行い、構造班は救助サイトでの危険度確認に加え、現地のホテルや JICA 事務所の状況調査についても支援するなど活躍した。

今回の救助チーム派遣は 2011 年のニュージーランド地震以来の地震対応の救助チームの派遣となり、長いインターバルを経ての、また、国連等国際社会での JDR をとりまく環境も変化するなかでの派遣となった。今回の活動は、新しい環境下での派遣としての教訓を残してくれるものであり、本報告書が活用されることを期待する。そのなかで、団長としては全般的な観点から次の点に言及したい。

- (1) UNOCHA による世界各国の救助チーム取りまとめの成果が現れ、現場では INSARAG の評価を受けたチームの重要性が看取された。JDR は「Heavy」の評価を受けており、国連主導のセクター分けに際しても、Heavy チームとして広範囲のセクターKを「単独で」任されており、今後も国連システムを活用して救助にあたることが重要である。災害現場での UNDAC の活動に対し日本から要員を引き続き派遣することも、「Heavy」の評価を受けている日本の救助チームに対して求められ、また、これら要員の存在が日本のプレゼンスを示す結果ともなっている。
- (2) また、次回以降の派遣への準備を兼ね、教育担当を置き、関係機関との接触等の際にはできるだけ同行させ、現場での折衝などを経験させるなど、数少ない現場での有効活用を推進することも一案である。救助活動が本筋であり、本務が多忙な際の活用には難点があるが、人道支援分野において、今後とも日本政府が国際社会において枢要な地位を占め、JDR が活躍するためには現場関係者の幅広い知識及びプレゼンスが重要である。同一人物が頻繁に派遣される国際チームがあるなかで、これとは状況が異なる JDR としては、少ない機会を最大限活用することが望ましい。
- (3) 今次派遣は 3 月に IER 評価（INSARAG External Re-classification：国連による外部再評価）が行われた直後の派遣であり、隊員の約半数弱が IER 時の関係者であった。IER については、事前の各種訓練、総合訓練、IER 本番と約 1 年以上にわたり、訓練等を通し、協力、人間関係を築いてきたものである。団長及び副団長（うち 2 名）、中隊長、医療、構造、通信など一緒に活動してきたチームワークが、実派遣に際しても好ましい成果を生み出したといえ、この種の訓練機会の重要性が確認された。
- (4) JDR が派遣される大規模災害の場合、プレスの関心が非常に高い。今回の派遣においては JICA よりプレス担当として追加で 1 名が関与し、同人の活躍により、複数現場等での対応も可能となった。多数のプレスに対し現地では大使館他のプレス担当とも協力が不可欠であるが、JDR 内にも担当副団長に加え、さらにプレス担当を置くことは有意義と思われる。
- (5) JDR の救助実績に関しては、発生した自然災害や被害の状況、先方政府の要請や対応、国連や他のチームとの関係など複雑な要因に影響される。しかしながら、発災から救助開始までの時間が生存者救助には重要であることは論を待たず、短い時間での現場への急行並

びにできるだけの生存者救助に向け、さらなる訓練、適切な対応が不可欠であり、今後ともこれらの改善に向け、本報告書を踏まえた関係者の努力が期待される。

今回のオペレーションを実施するうえで、現地の日本大使館、JICA 事務所、近隣を中心とする応援出張者などとの協力が不可欠であり、関係諸氏には協力につき感謝を申し上げたい。特に、初動においての活動サイト決定等については現地での被災国政府との調整が重要となっており、今後ともこの種のプロセスが重要と思われることから、JDR と被災国公館の協力につき、日ごろから、よく気を配る必要がある。また、JDR に参加した警察、消防、海上保安庁、JICA の各組織並びに関連機関、関係諸氏には急なオペレーションにもかかわらず、ご協力を頂き感謝申し上げます。そして、最後になるが、団長を補佐してくれた隊員諸氏に心からお礼の言葉を申し述べたい。

3-2 広報・記録

警察庁長官官房国際課 山下桂一

まずもって、今回の地震でお亡くなりになった方々に衷心よりお悔やみ申し上げたい。そして、JDR 救助チームのネパール派遣に伴い、お世話になった現地の日本大使館、JICA 事務所、関係諸機関、そして JDR 救助チームの皆様方に御礼を申し上げたい。

(1) 全体総括

2011 年 2 月のニュージーランド南島地震以来、約 4 年ぶりの実派遣に気持ちが高ぶった。つい先日 IER を受検し「Heavy」再認定を得たばかりで、私自身「今回こそネパールで必ず生存者を救出する」という熱い思いを抱いたのも事実である。しかし、現実はそんなに甘いものではなく、一言でいえば「認定試験と実派遣は大違い」ということだろうか。具体的には何だったのか。情報が錯綜するなかでの情報収集活動、装備資機材の搬送、衆人環視のなかでの救出活動等、枚挙にいとまがない。

今後、次の実派遣に向けて本派遣の活動を検証し、改善すべき点は改善していく必要があると思う。「やるべきことはやったのだから、悔いはない」で決して終わらせてはならない。これが私の本音である。

(2) 広報環境

被災地では、活動現場はもとよりチームとして移動するときも、JDR 救助チームはメディアやネパール国民から常に注目の的であった。したがって、現場ではメディア関係者と一般市民を区分する規制線を当方が設定したほか、チームの指揮本部が置かれたエベレストホテルでは張り紙を掲示してメディア関係者の出入りを規制し、指定場所のみで取材に応じることとした。

(3) 広報対応

1) 現地広報：団長による定例会見

毎日原則 1 回、指揮本部のあるエベレストホテルの指定場所で開催した。ただし、活動初日（4 月 28 日）は実施せず。

2) 活動現場

必要に応じ広報担当副団長または業務調整員（広報担当）がメディアの対応にあたった。ただし、4月29日のクリシュナマンディール寺院での活動現場では、団長自らが対応にあたった。

3) その他

タイの国営放送局から JDR 救助チームの活動資機材を取材したいとの申し入れがあり、5月6日、エベレストホテルの駐車場において広報担当副団長が対応にあたった。

(4) 取材申し込みと対応

一時的な対応は、広報担当副団長または業務調整員（広報担当）が行った。その後、在ネパール日本大使館（同大使館リエゾン経由）から各メディアへプレスリリースをお願いした。併せて、指揮本部入り口に定例会見実施の掲示を行った。

(5) 今後の課題

1) 取材対応時の背景

団長（副団長）の後方に会見用の JDR 救助チーム旗を準備したらどうか。日本チームが活動しているというアピールになるのではないかと。今回、ホテルの壁に JDR のシールを貼って試したが、はがれてしまった。

2) 広報体制の確立

今回、在ネパール日本大使館員（リエゾン、広報担当）にご協力を頂き、各メディアへのリリースが円滑に行われた。今後もこうした体制を築けると有難い。

・ JDR ロゴの活用

簡易テントなどにも「JDR ロゴ」を施せば、現地で日本のチームが活動していることが一目瞭然となり、広報効果が期待できる。

3-3 計画・情報分析

消防庁予防課危険物保安室課長補佐 鳥枝浩彰

4月25日にネパールにおいてマグニチュード7.8の地震が発生し、日本国政府はその日のうちに JDR 救助チームを派遣することを決定した。4月26日に成田国際空港に集結し、ネパールに向けて出発をした。

地震が発生し、翌日の正午には成田に集結する必要があったため、事前の情報については不足していたと考えられる。それらを補足するため、何ら情報を持たずに出発しなければならないという最悪の事態を想定し、情報入手手段を検討するべきであると考えられる。発災後数日以内は現地政府等も混乱していると思われるため、現地政府からの確な情報を入手することを期待することは難しいと考えられる。例えば地図については、観光地図等日本国内にいる間に入手できるものはできる限り入手する必要があると思われる。

また、被災国政府が混乱しているということは、On-Site Operations Coordination Centre (OSOCC)

でも情報が整理しきれていないと考えられるため、現地での活動サイトについても、被災国の日本大使館、現地 JICA 事務所を通じて、被災国の警察、軍等からできる限り具体的な情報を入手しておくように出国前に働きかけるべきであると思われる。JDR 救助チームが被災国に到着したらすぐに活動サイトの警察、軍等に接触し、活動をすぐに始めることが必要である。活動サイトについては、JDR 救助チームの活動に適した場所が望ましいと考えられるが、そこまでの情報を求めることが難しい場合は、現地に着いてから、ASR (Assessment Search and Rescue) を行う隊を編成し、救助活動と並行して情報を入手することが必要であったと思われる。

さらに、事前に被災国政府の行政組織を理解し、情報の流れを把握しておくことが必要であると考えられる。発災時に行政組織がどのようになり、救助活動等が行われるのかといった模式図を理解することが必要であると思われる。

現場での活動については、被災国政府の軍、警察等が協力的であったため、立ち入り規制がすぐに行えたことは大きかった。救助関係者は救助作業に専念できるようになっていたと思われる。

今回の派遣については、JICA ネパール事務所の協力もあり、ホテルを確保することができたため、2 週間近い長期の活動にも耐えることができたと思われる。現地でホテル等を確保することが長期の活動に向けて非常に重要な項目であるため、現地の活動では非常に助かった。

資機材については、資機材をすべて確実に被災国に持ち込むことは難しい場合もあり得ると考えられる。使用する飛行機、送ることができるキャパシティ等に関して、複数のパターンを事前に準備して、資機材搬送のマニュアルを検討する必要があると考えられる。

3-4 安全管理

海上保安庁警備救難部救難課 稲葉健人

安全管理担当副団長として、派遣決定後に実施した事項につき、派遣前、被災国到着時、捜索救助活動中と、時系列に沿って次のとおりまとめる。今後の派遣時の一参考資料となることを期待する。

(1) 派遣前情報収集（安全管理分野）

派遣決定後、まずは「外務省海上安全ホームページ」を参照、またインターネットで「ネパール」で検索し、報道やブログ等により被災状況を含め安全管理上重要だと思われる、治安情報・インフラ・余震発生情報等の情報収集を実施した。そこで得たポイントは次のとおり。

1) 治安情報

1996 年から 2006 年（11 年間）、内戦状態。終結後も 2011 年まで、国連 PKO 活動により停戦監視が実施。ネパール南部インド国境はオープン・ボーダー。インド及びネパール人は、無旅券で自由越境可。密輸・密売も頻繁に行われている。国内では密輸けん銃による殺人、強盗、恐喝、誘拐等の凶悪犯罪がしばしば発生。住居侵入窃盗が多発、外国人宅も対象内。外国人目当てのスリ・置き引き等多発。外国人をねらった誘拐や恐喝、外国人女性の強姦事件等も発生。

2) インフラ事情

道路には、信号、横断歩道がほとんどない。交通ルール・マナー順守意識は希薄。無謀な運転等が日常化。町中散策（歩行）は非常に危険。国内インフラ整備は発展途上。幹線道路の陥没や未舗装、歩道の不整備等多数。街灯等設備なし。夜間運転は陥没状況等の確認が難しく危険。地方では雨期に道路が土砂崩れや陥没等により通行不能となる箇所が多い。

3) 風俗、習慣

ネパールの多くの国民が信仰するのは、ヒンズー教。ウシが「聖なる動物」。ウシを自動車で跳ねた場合、人間の場合と同じ罰則が科される。「牛肉を食べる」等のウシにかかわる話題は避けるべき。左手は不浄。頭に神が宿っていると信じられている。

4) 衛生事情

衛生状態が非常に悪い。生野菜等は極力避け、加熱料理を食す。生水は絶対に飲まず、市販のミネラルウォーター等を利用。

5) 建物・余震発生状況

カトマンズ市内は、RC 住宅も散見されるものの、れんが造りの古い建物が多い。地方に行けば、ほとんどがれんがを積み上げただけの建物ばかり。震度 5 程度の強い余震が引き続き発生していて警戒が必要。

(2) 出発前及び活動前周知・注意事項

前記情報収集の結果から、成田空港到着時及び被災国到着後の BoO (Base of Operation) 設置後に開催した全体会議において、次のような注意事項を周知し、派遣中の安全管理を徹底した。

(成田空港集結時)

- ・異文化理解と尊重
- ・自己安全管理の意識づけ
- ・個人用防護具 (PPE) 装着・警報システム順守

(被災国到着後、捜索救助活動前)

- ・移動・活動中の資機材を含めた物品管理の徹底
- ・ASR2 活動時を含めた単独行動の厳禁
- ・現地移動時のシートベルト着用とドライバーの安全運転指導の徹底
- ・異文化理解と尊重
- ・余震に対する安全管理徹底

(3) 各状況において留意した事項等

1) BoO 選定

カトマンズ空港到着時、現地 JICA 事務所から派遣中の宿泊先について、エベレストホテルが確保できている旨、連絡があった。通常、救助チームは野営 (テント) を原則とし

ているが、今回は現地 JICA 事務所の配慮から、到着時には既にホテル確保がされている状態であった。一方で、まずは活動サイトの特定が最優先事項であり、この活動サイト特定により、BoO 選定も左右されることを現地 JICA 事務所担当者にお伝えし、RDC（受入出発センター）、LEMA（現地災害対策本部）、OSOCC 会議に先遣した団長からの方針を待つこととした。

他の国際救助チームの動向等に係る情報として、RDC は検疫を出たところに、UCC は空港敷地内に設置され、UCC 付近空地には、幾つかの外国救助チームが既に BoO を設置しているとの情報を得た。活動サイトによるが、情報収集の観点から、他国救助チームに倣って空港敷地内の UCC 用地近傍に BoO を設営することも選択肢の一つとした。

エベレストホテルは、空港から比較的近いカトマンズ市内にあり、車で 20 分程度であるとのことから、空港にて資機材を受領・確認している間に、先遣隊を編成し、ホテルの安全確認のための構造評価を実施することを検討した。

受託手荷物を回収後（ロストバゲージを避けるため、受託手荷物は各人で受領することとした）、ホテルの構造評価のために人員を派遣する予定であったが、救助資機材等については地元運送業者にて受領・市内託送が可能であるとの報告を受けたこと、加えて空港内 RDC 等に到着報告・情報収集に先遣した団長等から、当初の活動サイト候補地（ハヌマン・ドカ地区：被災国到着前に現地 JICA 事務所がネパール軍等からの情報収集の結果、選定し、到着時に提案があった）での活動決定の連絡があったことから、いち早い体制構築と以後の対応方針協議のため、いったんは全員で受託手荷物とともにエベレストホテルへ移動することとし、空港には数名の業務調整員を残し同ホテルへ移動した。

エベレストホテル到着後、チェックイン等を実施する前に構造評価専門家 1 名と安全管理担当副団長の 2 名で、同ホテルの構造評価を実施した。まずは、ホテル担当者立ち合いの下、外観調査・内観調査を実施。特に窓ガラスが割れていた部屋を確認した（※窓が割れている状況、壁にひび・剥離があるからといって一概に倒壊のおそれがあるとはいえない）。その後、Fire Control Plan 等の図面の提出を求め、余震発生時等の避難計画を立案した（資料提供を求めた際、ホテル側から国際救助隊がホテル建造物の構造安全に対し憂慮していると知られると困る、との抗議を受けたが、入手した情報については日本チーム内に限定し他言しないことを条件に資料提供を求めた）。

構造評価の結果、「宿泊先として、また BoO 用地として支障なし」との結論に至り、余震等発生時の緊急避難場所、避難経路を全体会議にて隊全体に共有し、エベレストホテルを派遣期間中の宿泊場所兼 BoO 用地として選定した。

2) 活動サイト

活動サイトでは機材の後着により、地震計による余震警報発令ができない状況であったことから、十分な安全管理要員の抛出・配置が徹底された。また、アナログ傾斜計やペットボトルの水などを使用する等、でき得る限りの最大限の工夫を凝らした安全対策が講じられた。幸いにして、派遣期間中に大きな余震に遭遇することはなかったが、定期的な安全確認の実施により、作業中に活動現場の倒壊建物の傾斜進捗が確認されたことは、安全管理が徹底された証といえる。

また、活動現場では、安全管理のゾーニングも確実に実施され、また待機・休息隊員に

よる部外者の活動サイトへの進入防止が確実に実施され、活動サイト直近にポップアップテントを設営するなどして、簡易指揮所兼待機所を設置し、資機材の管理等についてもここで適切に実施された。

3) 移動経路

ドライバーに対する安全運転指導については、現地 JICA 事務所を通じて実施し、また隊員等に対する移動時のシートベルト着用周知は、全体会議等の場を活用して実施した。しかしながら、現地での借用车自体にシートベルトの装備がなかったり、日ごろの交通マナーに対する認識のギャップにより、隊員・業務調整員から再三にわたり運転手に対し安全運転の指導を実施するも、彼らの危険運転状況につき、なかなか理解してもらえない場面も見受けられた。

(4) 所 感

- ① 副団長 4 名で担当を決め運用しているところであるが、全員が BoO にて活動しているわけでもなく、自分の所掌だけを理解していても、効率的に仕事はできず、最低限、全担当の Field Operations Guide (FOG) に記載されている程度は理解しておくべきである。
- ② INSARAG 主導による国際救助チームの枠組みに関する慣習・ルールについては、言葉の問題等もあり分かり難い部分もあるが、日本チームが保有している搜索救助活動に対する考え方（センス）、被災国内での行動基準については、INSARAG の枠組みに照らし合わせても大きく隔たりをもっているものではなく、一番重要なことは、国際社会においても「ほう（報告）、れん（連絡）、そう（相談）」の励行であり、UCC、VOSOCC (Virtual OSOCC) 等を通じて、日本チームの運用方針・現況につき、「ほうれんそう」を実施していれば、われわれの能力を十分発揮できる。
- ③ 個人としては、今回は 2003 年のタイ・スマトラ地震津波災害（当時小隊長）以来の計 4 回目の派遣となったが、10 年前に比べると非常に組織化され、合理的に活動できるようになっていると感じた一方、チーム総員が 70 名となったことから、すべての行動（空港、被災地での移動を含め）に時間を要するうえ、隊員と指揮部との距離も遠くなった気がした。隊の決定方針については、決定のプロセスも含めたきめ細やかで丁寧な隊全体への情報共有が必要であると感じた。

3-5 連絡調整ロジ

JICA 国際緊急援助隊事務局緊急援助第二課 山根誠

3-5-1 連絡調整

(1) LEMA 及び OSOCC (UCC)

4 月 28 日の現地到着後のサイト選定は、空港到着時点で既に発災後 72 時間を経過していたことから、早急に活動サイトを選定する必要があった。空港において大使館及び JICA 事務所関係者から先方政府の要望（カトマンズ市内のハヌマン・ドカ）を確認後、RDC での助言に基づき、指揮班関係者は空港から直接 UCC 立ち上げを準備中のオランダチームテントを訪問、ハヌマン・ドカ周辺では他チームの活動重複はなく、活動対象として問題

はないことを確認のうえ、同サイトを対象に先遣隊を派遣することを決定した。本隊は空港を14時10分に出発、着陸の約3.5時間後となる15時10分に先遣隊を迅速に出発させることができたのは成果の一つである。

UCC 定例会議は4月28日夕方以降、毎日8時及び18時に開催されることとなり、日本隊は団長、副団長（計画・情報分析、連絡調整・ロジ担当）、業務調整員、大使館書記官を含む4～5名が毎回参加した。4月29日の同会議では、カトマンズを中心に15のセクターが設定され、日本隊はセクターKを担当、5月1日の同会議では、カトマンズ郊外の地方サイトにて新たに3カ所のセクターが設定された（日本隊はセクターPを割り当て）一方で、撤収計画の検討指示があり、撤収計画策定において難しい判断を迫られることとなった。

救助チームが生存者救出の成果を上げるためには、隊の到着後、早急に救出可能性の高いサイトにおいて迅速かつ広範囲のASR活動実施が求められる。このため、隊の現地到着時まで、より具体的かつ詳細な現地被災情報収集がカギとなることから、先遣隊の派遣、現地大使館及びJICA事務所関係者の協力、事務局におけるVOSOCC等関連情報の分析・発信（特にフライト時間中）等を組み合わせ、迅速かつ詳細な情報収集体制の構築が重要である。

(2) 大使館、JICA事務所及びJDR事務局

在ネパール日本大使館からは、基本的に常に館員が隊に同行頂き、外務省及び大使館との連絡調整を円滑に進めることができた。また、JICA事務所は事務所建物の損壊によりホテルの講堂内に同居する形となったこともあって、救助チームに続く医療チーム、自衛隊派遣、物資供与が集中するなかで多忙を極める状況であったにもかかわらず、ロジスティクス関係を中心とした隊との連絡調整はスムーズであった。また、今回の派遣では日本からのマスコミ取材が多く、同対応において地域部から応援のあった隊員の貢献が大きく、今後の派遣でも広報関係に詳しい人材の参団は必要不可欠であると考えている。

JDR事務局との連絡においては、携帯電話の通信に一部支障があったが、ホテル内の専用電話回線やインターネット通信も可能であったことに加え、事務局の夜間及び大型連休中のバックアップ体制も構築されたため、連絡調整に大きな支障はなかった。

3-5-2 ロジスティクス

(1) フライトの選択

当初、チャーター便でのカトマンズ直行を検討したが、JALの定期便が就航していない空港の場合は空港調査（パイロット免許・シミュレーション、管理会社、ハンドリング業者、整備業者、地上委託業者との調整）に3日程度必要となることから断念、B-777が就航しているタイ航空での乗り継ぎを選択した。チャーター便利用の場合、派遣命令から24時間以内に出発するにはJALが現在就航している空港へのフライト以外はほぼ不可能であることから、最終目的地に向けた経路便の利用可否及び貨物積載可能量を慎重に検討したうえで、フライトの選択を検討することが肝要である。

(2) 資機材輸送

カトマンズ到着後の隊員及び資機材輸送は、JICA 事務所による必要十分な車両手配と経験豊富な業務調整員による運用手配により、大きな問題なく実施された。一方、航空便による国際輸送については、バンコク発カトマンズ行きのタイ航空便に預入手荷物及び貨物のオーダーが集中したこともあって、バンコクでの機材コントロールと計画的な機材輸送が困難を極めた。

ネパールのようにフライトが限定される国の場合、同一便で資機材を一度に輸送することができず、複数日/複数便にわたる輸送に備え、機材の絞り込みと明確な優先順位設定に基づく輸送計画の策定が重要となる。さらに、分割輸送等に伴って人員・機材が制限された初期の局面で、どのような現場活動にまず着手すべきか、そのために優先的に積載すべき資機材と要員は何か、搜索救助機材と生活資機材のうち最低限必要な数量等について安全管理面も含め、シミュレーション型の技術検討等を通じて、いくつかのモデル・プランを準備しておく必要がある。

(3) 柔軟な隊及び資機材編成

発災後 72 時間の搜索救助活動が最も重要であることは言うまでもなく、フライトの状況により十分な貨物の搭載が困難と見込まれる場合には、隊員の到着と同時に、到着後 24～48 時間の活動に必要な不可欠な資機材輸送を確保することが重要である。今回、ネパールに派遣された 76 の救助チームのうち、INSARAG 認定チームは 18、うち「Heavy」級認定は 12 であったが、その半数の 6 チームは「Medium」または「Light」でのチーム編成であったことから、必ずしも Heavy 級編成に固執することなく現地の被災状況とロジ事情に合わせた柔軟なチーム編成の検討は重要であろう。したがって、今回同様の事例に備えるべき対策として、搜索救助用資機材及び生活資機材の双方について、隊員到着と同時に必要不可欠なものとは後送により対応可能なものの切り分けを整理したうえで、送付優先度の設定を早急に実施する。併せて、優先度が高い資機材のうち預入手荷物化が可能なものについては、費用も勘案のうえ可能な範囲で推進したい。

また、個人携行荷物について重量制限の徹底、あるいは 3 日程度の着替え及び常備薬等のみ手荷物とし、スーツケースについては成田空港に保管もしくは後送扱いとすることも検討が必要と考えられる。

(4) BoO の運営

本隊到着直後に構造評価専門家によるエベレストホテルの構造診断を実施、余震リスクに対する安全性を確認したうえで Base of Operation (BoO) を設営した。同ホテルの利用は、到着後の迅速な搜索活動開始に貢献しただけでなく、電気、通信、セキュリティ、生活環境等の面で野営に比したメリットが大きく、被災地到着当日に指揮本部及び隊員の生活環境を整備することができたことは隊にとって非常に有益であった。

BoO 及び活動現場での食事提供・水分補給に関して、医療班と業務調整員が共同して実施した。また、活動現場には、医療班及び広報担当に加え、可能な限り業務調整員が部隊に帯同した。医療班の助言を得つつ、現場での食事提供・水分補給等のための環境整備に努めたが、野営の場合では他業務との兼ね合いから、現場に帯同するロジ要員の捻出は容

易ではないものと懸念される。派遣時の状況に応じ、業務調整員のみでは食事の準備等の作業が回らない場合は、所掌業務にこだわることなく隊員の協力を得ることも必要である。特に活動初期は搜索救助活動を最優先に取り組みると同時に BoO 設営等の業務も重複することから、思い切ったメニューの簡素化・食材の軽量化も検討が必要と思われる。

(5) 物資補給・通訳等

水、燃料、潤滑油など USAR（都市型搜索救助）活動に必要な消耗材は、到着時に JICA 事務所により調達済みであり、食材については、ホテル近くのスーパーマーケット等において問題なく現地調達が可能であった。ただし、サイトが首都以外の地方となる場合はこの限りではなく、計画的な輸送体制確立による自己完結型の物資補給体制の確立は重要である。

ネパールは日本渡航経験者も多く、事務所スタッフ以外にも日本語の堪能な通訳を複数確保できたことは、ASR/レッキ（偵察、調査）活動やサイト選定、先方政府関係者との各種交渉において極めて有用であった。

3-6 医療班

順天堂大学医学部附属練馬病院 杉田 学

今回の派遣は JDR が 2015 年の IER を通過した直後の派遣であり、チームにとっては国際標準の形が十分に用意されているはずであった。そのことを踏まえたうえで今後の派遣に生かすことを期待して、医療班としての活動報告を行う。

(1) 派遣決定までのプロセスと参集

救助チーム本登録者に F ネット配信されたのが 2015 年 4 月 26 日 3 時 52 分であり、参加申し込み締め切りが 8 時 00 分であったことを考えると、通常の生活を送っていると募集自体に気づけない可能性が高い。救助チームは極めて早い初動が必要になるため、国際的な災害に日ごろから注意を払い、VOSOCC 等を参照して積極的に情報を収集する必要があると考えられる。また選考に漏れても、東京以外の居住者は決定通知が配信される前に成田空港に移動する必要があるが、これが空港支援に十分な人員が確保できた一因となった。

(2) 結団式～出国

医療班内のチームビルディング並びにチーム内の情報整理を行った。メディカルチェックの結果、持病に対して投薬されている数名の隊員を抽出できたため、現在の体調に加えて持参薬が十分量あるかどうかについても確認した。救急救命士が 2 名であったため各中隊に 1 名ずつ配置することと、不在の 2 小隊には医療とのリエゾン要員を配置することを指揮本部に依頼した。

(3) 出国～現地到着

経由地のバンコクからカトマンズの空港に至る商用機の輸送能力に限りがあったため、隊と共に現地へ持ち込む資機材を選択する必要がある。そのプロセスに関してはロジスティ

クスの報告に譲るが、医療班も医療資機材をすべて持ち込めない場合について、パッキングリストを照らし合わせながら2段階の場合分けをしてリストアップした。今後も同様のケースに備えて、現在用途別に組んでいる資機材構成を見直す必要があるかもしれない。

(4) 現地到着～BoO 設営

今回の派遣では、ホテルへ滞在することとなった。そのため、衛生や健康管理については野営の場合に比べ格段に有利な状況であり、小隊ごとに救命士あるいはリエゾンを通じて情報発信を心がけた。BoOへ帰隊時のdecontaminationを考慮しなければならなかったが、プールの水を使用してブラシを現地調達することで環境を整えた。

(5) 現場活動

2週間と長期の派遣であり、活動形式も必ずしも中隊単位とならないことが予測されたため、医療班の人員をチームには固定せず臨機応変に帯同することとした。結果的にメディカルマネジャーを含めすべての医療班スタッフが現地活動にかかわれることになり、隊員とのコミュニケーションは良好であった。現地活動に関しては業務調整員と協力して休憩場所の確保に務めたが、ワンタッチテントがあったことが大変有用であった。今後も現地到着後から即現場活動となることが予想され、第1陣の資機材にワンタッチテントを含んでおくことが必要と考える。

(6) 医療処置

幸い隊員には活動に伴う大きなけがはなく、残念ながら生存者の発見には至らなかったこともあり、点滴や静注薬を使用する場面はなかった。救助犬2頭がストレスによる下痢と熱中症の影響で重度の脱水となり、それぞれ乳酸リンゲル液の輸液を行った。また、現地の食事による浸透圧性の下痢を訴える隊員が多く、整腸剤を使用するとともに食生活による予防を促した。

(7) メディカルマネジャーの責務

メディカルマネジャーは医療班のリーダーであるとともに、指揮本部の一員であり隊全体の戦略についてもかかわらねばならない。今回の派遣ではIEC (INSARAG External Classification) 評価員を務めている経験を基に、USAR coordination meeting、Health cluster meetingにも参加して情報収集に努めた。ASR2にも参加し、worksite triage sheetの記載にも協力した。医療班はJDR救助チームに継続的にかかわる存在として国際的な取極めにも習熟しておくべきである。

(8) 派遣期間延長にかかわる諸問題

当初の派遣予定は5月2日までの1週間であったが、結果的に2週間の派遣となった。結果的に医療班のうち2名(沢本医師、山口看護師)は5月3日に現地から帰途に就くことになった。

3-7 中隊長

(1) 第1中隊：東京消防庁 萩森義男

ネパール地震災害に伴う JDR 救助チームの活動については、主に老朽化したれんが積み構造の建築物や住宅等が崩落した現場で、手掘りによる活動となった。現場活動は余震を警戒しながらの厳しい環境下であったが、各隊員の士気は高く、安全を大前提とした積極的な部隊活動を展開することができた。

被災地への到着までには、運航の遅延、資機材到着の遅延や重要資機材の未着、予期せぬトリブバン国際空港の混雑による着陸不可等、幾多の問題が勃発したが、チーム一丸となって知恵と工夫を凝らして克服することができた。

このたびの災害派遣メンバーは、2015年3月に IER を受検した隊員も多く派遣され、移動時間を有効に活用しチームビルディングも図ったことから、チーム全体として「これからの活動をやり抜くぞ!」という覚悟がみなぎっており気迫もあった。このとき、このチームなら大丈夫だなという思いが湧くとともに、中隊長として隊員を頼もしく感じた。各小隊長は部隊をよくまとめ、隊員も積極的に小隊長の指揮下に入って行動しており、規律も素晴らしい部隊となった。

カトマンズには発災から 72 時間後の到着となり、空港から活動拠点となるエベレストホテルまでのバス移動中の車窓から見る街は、倒壊家屋も目にすることなく、行きかう人の姿も平穏であり、今まで国内で経験してきた被災地とは異なる光景だったものの、活動現場に行ってみると目を覆う被害であり、思わず息をのむ状況であった。

日本チームの活動は、カトマンズを中心にハヌマン・ドカのクリシュナマンディール寺院での、遺体1体の収容、サクーでの9歳男児の搜索活動に加え、ゴンガブでの1~2階が座屈したゲストハウスの搜索活動といった、いずれの現場も危険要因をすべて排除することができない過酷な状況下で懸命な活動を展開した。一方、派遣期間の延伸により、各級指揮者は隊員のモチベーションを維持するため、苦労があったとうかがっている。

われわれ日本の救助チームは、被災者に寄り添い活動した部隊であり、見守る被災者には心強いものがあつたものと確信している。今回の任務を一人のけが人もなく完遂できたことは、団長をはじめとするそれぞれの立場の方々が全身全霊をささげて任務を遂行したからであるといっても過言ではなく、感謝をするところである。

終わりに、今回の災害派遣では、資機材の到着が遅れるなか、活動初期、活動現場の割り振りにより、救助資機材を必要としない現場であったことから手掘りによる活動を展開することができた。資機材輸送については、今回の教訓を生かすためにも、資機材の搬入優先順位や出発時の積み込み確認等の仕組みづくりが必要であると考えます。

(2) 第2中隊：警視庁 清水邦彦

1) 活動以外

a) チームビルディング

団長、副団長、中隊長とは、2014年から数回の訓練や研修を重ね、顔を合わせていたので、任務割りや活動方針等の検討について意見を交わしやすかった。

b) 資機材、入国の遅れ

これらについては、海外で活動するうえでの特徴が現れた派遣であった。各種資機材

の輸送遅れや行程とおりに被災国に入国できなかったため、救助活動が大きく制限された。しかし、被災した国へ赴くわけであることから当然予想されるトラブルであり、多くの関係者が海外で活動することの難しさを再認識できたと思う。

資機材や入国の遅れは、今後も当然予想される問題である。救助隊員として、現場では絶対に愚痴をこぼしてはいけないし、最大限、被災国のためになる活動に専念すべきである。今回、救助隊員は、「できる活動」に専念し活動に集中していたと思う。

c) 派遣期間の延長

活動期間の延長について救助隊員に不安はなかった。全隊員の前で、団長から延長に係るチームの現状と理由を説明していただいたので、全隊員がチームの置かれている状況を理解でき同じ認識を共有できた。より一層チームが団結したと感じた。

2) 活動

a) ハヌマン・ドカ

他国チームがマーキングを記し終了した現場であるにもかかわらず、ご遺体1体を収容できたことは大きな成果であった。的確な活動サイトの特定に加え、地元の重機やネパール軍のサポートがあったからこそ完遂できた現場であり、チームの士気が上がった。

b) サクー

BoO から約 45 分に位置する山岳地域での活動であり、BoO を中心に活動した場合は十分な休憩、待機ができなため、業務調整員等を含め 2 個中隊で現場入りした。万全の体制をとったことから不安はなく効果的に活動できた。

サクーでは、行方不明者に関する情報に信憑性はあったものの、目撃者（少年の祖母）がいたにもかかわらず、具体的な場所を特定できずに活動しなければならなかったことは、多少活動に影響した。結果として隊による発見はなされなかったものの、「行方不明者の解消」という目的には十分役立てたと感じている。

c) ゴンガブ

本活動も 2 個中隊で現場入りし十分な体制で臨んだ。任務は行方不明者の解消が目的であり、ネパール政府の要請によるものであった。

傾いた建物での活動であり危険を伴うものであったが、構造評価担当の指示など隊全体で情報を共有し、安全管理も十分であったと感じている。隊員の直近で活動していた各小隊長の的確な指揮の下、隊員の統制がとれており目的は達成できた。

派遣全般を通して、隊員に大きなけがや病気がなく日本代表として任務を終え、全隊員が本来業務に復帰したことで、日本チームとしての成果はあったと感じている。

3-8 ハンドラー

警視庁 山川良博

(1) 救助犬の輸送、体調管理について

救助犬の検疫関係は成田空港で確実に実施され問題はなかったが、貨物の関係で輸送時にハンドラーと別便での輸送となってしまった。また、カトマンズ空港の混雑により 1 日遅れ

での到着となり、救助犬の水分補給、食事がうまくいかずストレスを与えてしまったため、活動期間中に犬が体調を崩す一因となった。ただ、サーチ活動等に支障はなく、ASR2 の作業現場では、IER 受験他の訓練どおり、十分に能力を生かすことができた。活動期間中、救助犬2頭に点滴を実施したのも100%の力を出すために実施したものである。

(2) 現場での活動について

各中隊との連携も良く、部隊到着時の最初に救助犬のサーチ活動を実施し、要所要所に、救助犬を投入しての活動はすばらしいものがあつた。サクー地区での閉鎖的空間に救助犬を投入しての活動、軍からの要請で部隊活動以外の場所にてASR2活動ができたのも、これからの運用の一步と思う。

私たち、救助犬チームが初期の目的である活動ができ、目的を達成できたのも、外務省、JICA、三庁の皆さん、チームがあつてこそできた仕事と思う。これからもよろしくお願ひしたい。

3-9 構造評価

(株) 構造コンサル東日本 高橋 勇

(有) 構造設計舎 一條 典

(1) 構造評価活動概要

4月25日 夕刻、ネパールでの震災を報道により知る。

4月26日 3:50 ごろ、電子メールにてJDR救助チームの派遣通知及び構造評価専門家としての参加募集連絡があつた。8:00 までに参加の意思表示を電話で行い、2名の構造評価専門家の派遣決定連絡を9:00 に受信。12:00 成田空港集合。結団式後から現地到着までの間に以下を行った。

① 出発前の全体打合せ

- ・ 現地の建築構造の特徴は、他の発展途上国同様に古い建築物はれんが造であり、比較的新しいものは鉄筋コンクリート造であるが、壁はれんが造である。また、雨水利用のため屋上に雨水貯留槽があり、燃料として天然ガスを利用していることから各建築物にガスタンクを備えていることが多い。
- ・ カトマンズでの倒壊率は低く、80%が倒壊していないとの情報がある。また、余震も頻発していることもあり、余震による倒壊に注意が必要である。

② 機内における各小隊の構造評価隊員との打合せ

- ・ 余震が頻発しているとの情報より、地震警報器の設定震度は、P波、S波とも震度3(気象庁震度階)とする。
- ・ 完全に倒壊している建築物よりも倒壊していない建築物が危険である。2°を超える傾斜は要注意であり、救助に焦る隊員を引きとめることも構造評価の隊員の任務である。鉄筋コンクリート造の建築物に木材のショアリングは、効果が期待できない。

4月27日 終日移動

4月28日 カトマンズ到着後、構造評価専門家2名が二手に分かれて、一人は本隊の活動拠点となるホテルの危険度調査を行い、軽微な損傷はあるが大きな危険はないと判断し、指揮本部に報告した。また、もう一人はハヌマン・ドカに隣接するクリシュナマンディール寺院倒壊跡の救助活動に伴い、活動域及び周辺の構造評価を行った。求められたサイトは2カ所であったが、そのうちの一つである旧王宮の建物は、完全には倒壊しておらず、また、隊の資機材も不足しており内部での活動は非常に危険であることを、同行していた第1中隊長に進言した。もう一つの活動候補地であるクリシュナマンディール寺院は完全に倒壊しており、現場そのものは安定していた。周辺は余震で倒壊の可能性がある建築物（寺院）に囲まれていたが、余震等の場合に待避可能な場所があるため、比較的安全な活動が可能であることを進言し、同サイトでの活動が決定された。救助活動中であっては周辺建物の観測を行い、活動隊員の安全を確保した。

4月29日 前日に引き続き、クリシュナマンディール寺院での救助活動に伴い、安全確保のための活動を行った。ネパール政府よりの要請によりサイト内の別の場所の構造評価を実施。瓦礫を除去しても建物の崩壊はないか問われた。瓦礫の厚さ、建物の傾き等を考慮し回答した。また活動現場に隣接する建築物に崩壊の危険性があったため、建築物の動きを把握するためのマーキングや目視による監察を実施。隊員に警告準備とした。もう一人はバクタプールのASRに同行し、救助活動の安全性について、周辺未倒壊の建築物は、れんが造であり老朽化、風化が激しく余震による倒壊の可能性が高く、また、建築物の高さも比較的高く、路地が狭いため周辺建築物が倒壊した場合に待避場所が確保できないことから、非常に危険であることを助言した。

また、JICA ネパール事務所の被災調査を実施した（現地職員が震災後に事務所建築物が危険ではないかとおそれているため JICA ネパール事務所所長の依頼により行った）。

4月30日 引き続き、クリシュナマンディール寺院での救助に伴う安全確保のための活動を行った。ハヌマン・ドカ地区の軍捜索チームの要請により被災した旧王宮建物や近傍の建物の崩壊部分のASRと構造評価を実施。同時に日本チーム担当のセクターKのASRに同行した。空港北東側周辺には、倒壊建築物は見られるが、行方不明者の情報はなかった。しかし、車で東側に40分程度のサクーという町で倒壊建築物が多いとの情報を得、サクーでのASRを行った。

現地 JICA 事務所の職員に事務所の被災状況を説明、被災がすべて仕上げの亀裂であり躯体への被災はないと説明した。

5月1日 前日、ASRを行ったサクーでの活動が可能か調査する第1及び第2中隊長、中隊長サポートに同行し、活動の安全性について助言した。情報により行方不明者 1

名がいることを確認した。この地域の建築物はバクタプールと同様に、れんが造であり老朽化、風化が激しく余震による倒壊の可能性が高いと判断された。しかし、建築物は比較的低層であり、行方不明者情報のある倒壊現場には、完全ではないが待避可能な場所があることから、救助活動が可能と判断した。

午後より第 1、2 両中隊がサクーでの救助活動を行うこととなり、構造評価専門家 2 名とともに活動現場及びその周辺の安全管理活動を行った。

5 月 2 日 前日に引き続き、終日サクーでの救助活動の安全管理を 2 名とも行った。

5 月 3 日 引き続きサクーでの活動のため、現場に向かったが要救助者が発見されたため、サクーでの活動を終了した。

午後よりカトマンズ市内北西側のゴンガブの ASR に同行した。

5 月 4 日 警察より依頼のあったゴンガブの倒壊建築物 2 カ所の調査に同行した。そのうちのひとつであるパスチム・ポカラ・ゲストハウスでの行方不明者捜索活動が決定された。

本倒壊現場は RC 造（壁はれんが）桁行方向 5 スパン梁間方向 2 スパン、5 階建てのホテル（ゲストハウス）であり、1、2 階がパンケーキクラッシュしていた。2 階部分は完全には潰れておらず梁間方向道路側に約 10° 傾いていた。周辺建築物も小破～大破の状態であり、余震による倒壊の可能性がある。活動建築物においては、道路側と反対側の 2 点に傾斜測定位置のマーキングを行い定時測定を実施した。

5 月 5 日 前日に引き続き、パスチム・ポカラ・ゲストハウスでの活動に伴い、当該建築物及び周辺建築物の倒壊に留意し、傾斜角計測などの安全管理を行った。途中で安全管理の隊員より、隣接建築物の傾斜が報告され計測したところ 4° の傾斜であった。以降定期的な傾斜角の計測に加えた。また、当該建築物の傾斜を測定していたところ、桁行方向の傾斜が 1° 程度増加している様子がみられたため、いったん、活動を中断し注意を与えたのち、活動を再開した。

5 月 5 日 構造評価専門家は同日、帰国することとなり構造評価専門家としての本派遣チームでの活動は終了した。

(2) 活動における課題

構造評価専門家と各小隊所属の構造評価隊員との間で、現地到着前において打合せやコミュニケーションを交わす場はあったが、活動現場に入ると隊員は小隊の一員として活動するため、それぞれ個別に活動している感があった。活動現場においても意見交換を行える方法があった方が良く考える。

また、現場到着後の周辺状況の変化がないかある程度の状況を記録し相互隊員や構造評価専門家同士の情報の把握が必要と考える。シートの作成等今後の課題と思われる。建物の傾

斜、写真（全体、特に大きい亀裂幅等）、瓦礫撤去の量や搬出に必要な時間など把握するため図面を描くことや深さの把握のための水準器等機材の希望もある。

3-10 業務調整員

JICA：松本勝男、神内圭、村上淳、山崎泰正、江崎晴香

JOCA：中野照人、井川太士、渡辺大介

(1) ホテルとの調整

本派遣では、通常と異なり、ホテルの中に BoO、いわゆる指揮所及び宿泊所を設け、そこを拠点として捜索・救助活動を行った。このため、業務調整員の仕事として、主にホテルとの連絡・調整が必要となった。

ホテル側と調整を行った事項は、ホテルの部屋予約、指揮所のための会議スペース（Wi-Fi 環境、固定電話設置等の環境整備含む）、機材置き場（含む警備員）、支払い調整等に加えて、同時に派遣され同ホテルを利用していた医療チームとの部屋共有の調整等である。

救助チーム、医療チーム、防衛省調査チーム、他国軍やドナー等も同ホテルをさまざまな期間、形式で利用するなか、日本からの各チームも派遣期間や人数等に変更が多く、不確定要素が多いなか、臨機応変な対応が必要であった。調整の際に、主に留意すべきと思われる点は以下のとおり。

1) ホテル側キーパーソン及び TOR の見極め

ホテル側の最終決定者を確認し、重要事項は必ず最終決定者と調整する。また、各従業員の TOR（Terms of Reference）を確認する。従業員によっては、TOR 外、権限外の事項についても言及する従業員がいるので注意が必要。

2) 在外事務所（ナショナルスタッフ含む）との連携

在外事務所が平時からホテルと調整していることが多く、ホテルとのコネクションや効率的な調整方法に関するノウハウをもっている。事務所との連携方法、支援の範囲、支払いの方法等の調整を行う。

(2) 在外事務所・JDR 事務局との連絡調整

チーム派遣が想定される規模の災害が発生した際には、チーム派遣の実施にかかわらず、時機を失することなく在外事務所に応援要員（事務局からの連絡に対する窓口要員）を速やかに派遣することが望ましい。災害が大規模であると、在外事務所自体が被災している場合も想定され（本派遣はまさにこのパターン）、また、緊急援助隊のスキームを理解している事務局員等が在外事務所支援に加わることで、その後の調整がより円滑になることは間違いない。

(3) 被災地空港到着時の人員・機材のマーシャリング

JICA ネパール事務所が必要十分な車両を空港に配置しており、日本大使館員の支援により査証の即時発給が受けられたこと、トラックを制限区域へ進入させて即時通関により機側で

機材を受領できるよう調整が事前にされていたことから、おおむね円滑に進めることができました。

なお、入国前段階で次の各班分けを行い、無線で現在位置・状況を共有できる体制をとった：情報集約・統制、資機材通関・受領、受託手荷物受領・隊員誘導、ホテル先発、RDC 接触、LEMA 情報センター接触、救助犬の入国検疫・通関支援

(4) 救助犬の帰国手続き

1) 検 疫

帰国に備えるため、JICA ネパール事務所から紹介された民間獣医に BoO へ往診を依頼し、JDR 事務局員が記載要領と様式を持参した成田帰国検疫用の必要書類〔①犬の輸出検疫証明書（裏書き）、②Certification for Dogs...to be imported to Japan〕の記入・発給を4月30日に受けた。なお、同医は政府指定の検疫獣医（Senior Veterinary Officer）であることから、ネパール動物検疫所への相談・出頭は不要であった。

これらの発給書類を JDR 事務局経由で成田空港動物検疫所へ事前送付することにより、同所から「動物の輸入に関する届け出受理書（5月2日帰国指定）」の事前発給を受けた。

その後、チームの本邦帰着日が5月9日で確定し、上記書類の有効期限である7日間を超過することとなったため、獣医に再往診を依頼し、書類日付の訂正を受けることにより書式を整えた。

2) 航空機搭載

JDR 事務局経由で本邦旅行会社から伝達された情報によれば、タイ航空は規則により犬の搭載は航空貨物扱いに限るとのことであった。

カトマンズ空港のタイ航空オペレーション事務所を訪問して上記扱いを確認したところ、上記規則は承知しているものの、非常時であるため救助犬は受託手荷物扱いで搭載しており、JDR にも適用を確約することのことであった。実際にチーム帰国時には円滑な受託手続きを受けた。ただし、犬舎が手荷物規定寸法を超えているため、超過料金が適用された。

(5) 機材の返送

航空輸送業者の選定にあたっては、当方指定日に BoO で集荷し速やかに成田仕向けで通関手続き・搭載手配を行うことを条件とし、先方担当者と相対で諸条件を確認したうえで、社を選定した。同社からインボイスは危険品と通常品に分けて作成するよう指示を受け、機材担当調整員が同要領に基づいてインボイス2通を作成して手交した。また、同社からの申し出及び JICA ネパール事務所の承認に基づき、契約書の作成は省略した。

(6) 資機材管理

資機材の管理、置き場所は、BoO 設営地によって左右される。野営するのか、ホテル泊なのか。24時間管理体制をとるのか、とらないのかといったケースバイケースの状況で、部隊に負担がかからないような管理方法の選定が求められる。

1) 管理場所

今回の派遣だけで述べれば、ホテル泊のため現地事務所を通じてホテル側に保管場所を事前に要請し駐車場の隅を確保したが、ホテル内の BoO からは目が届きにくく、貼り付け管理が必要な場所であった。一方、ホテル内 BoO の直近に営業されていないプールサイドがあり、ホテル関係者以外は容易に入ってくることができない環境であったことから、ホテル側に要請しプールサイドを使用する許可を取り付け保管場所として使用した。

本派遣は五月雨式に資機材が届くような状況であったことからプールサイドに物量が収まった。フルスペックの資機材ではプールサイドの使用は困難であったと思慮される。

撤収 2 日前にホテル側の事情により、プールサイドが使用できなくなったことから、資機材を駐車場に移動し、警備員を要請した。

2) 管理方法

資機材の到着状況により各小隊の資機材担当と話し合ったうえで、種別ごとの区分をした（捜索、救助、安全管理、生活）。業務調整員、救助隊員の資機材担当が管理しやすい方法の選定が必要である。

3) 資機材調達

a) 事前調達（オイル、発動発電機、スコップ・バケツ）

出国前に、ネパール事務所に対してガソリン、エンジンオイル、発動発電機、スコップ、バケツの調達を要請したが、4 サイクルオイルは用意できるものの 2 サイクルオイルについては不明との回答であった。ネパールはバイクの需要があり、2 サイクルオイルは現地で容易に調達することができる状況であったが、事前調達はできなかった。2 サイクルオイルは、USAR 活動資機材において必要不可欠なオイルであることから、現地事務所に対し重要性を説明し強く要請すべきであった。

発動発電機については、カトマンズで現地の発電機を 10 台調達し、使用も可能であった。しかし、変圧器、コンセントの差し込み器具の数が不足しており、10 台すべてを使用することはできず（2 台程度使用可）、発電機の容量の指定、差し込み器具も併せて要請すべきであった。

資機材担当として、救助隊員（資機材担当）とコミュニケーションをとり、必要資機材の把握をスムーズにするべきであった。業務調整として、現場に同行することも重要である。

b) 現地調達（スコップ、ザル、ハンマー、くぎ、コンパネ）

スコップ、ザルについては、サクーでの ASR2 での要請があった際に、容易に調達が可能であったことから、部隊出動までに準備することができた。サクーでは、これら資機材の使用頻度が高くスコップについては破損したものもあった。数量的には 5 個ずつ用意したが、小隊ローテーションからも妥当な数量であった。

ハンマー、くぎ、コンパネはサクーにおいて簡易のショアリングの可能性があったため購入したが、使用には至らなかった。

(7) 救助犬出国

救助犬出国手続きについては、救助犬担当がフライト調整と兼務しており、副担当が実施した。派遣中には、成田の動物検疫所、警察救助犬担当と連絡調整を実施した。

救助犬については、出国から帰国まで業務調整員の担当が不可欠であるため、出国前に救助犬の検疫について被災国の条件を把握する必要がある。入国後は速やかに帰国時の検疫の調整（獣医、証明書）と手続きを開始する必要がある。

(8) 広 報

派遣時の業務内容は、毎日夕方に行った団長による日系メディア向けブリーフの準備・調整、各メディアからの問合せ対応及び救助チームの活動予定・実績等の情報提供、そして現地作業場でのメディア取材調整・規制・インタビュー対応等が挙げられる。

今回はメディア取材が多数あったが、日本出発時の広報室担当者との打合せに基づき、なるべく丁寧に活動状況の紹介や積極的な取材対応を行うことを心掛け、活動現場への誘導・現地ブリーフなども行った。このため、メディア（外国含む）とは総じて良好な関係が構築され、気軽に質疑できる間柄になったものと思われる。他方、現場で活動する隊員の作業の支障とならない配慮が常に必要である。

(9) ネパール事務所との調整

調整事項は、日本語・ネパール語の通訳雇用、日々の車手配、JICA 業務の広報等であった。事務所のビル自体が地震の影響を受けた関係で、結果的に救助チームと同じホテルの会議室で一緒に業務ができたことは、連絡・相談等を効率的かつ直接的に行うことを可能とし、良い環境であった。事務所は医療チームや自衛隊チームのロジ等もサポートしており、業務が集中していたが、非常に協力的で難はなかった。他方、救助チームの当日の活動が直前に決定される場合、特に通訳の予約・手配に柔軟性が必要であった。

(10) 軍・警察との調整

作業現場における軍・警察の作業部隊との作業分担・調整や、特に地震救助活動の中心である武装警察本部からの情報収集を行った。また現地での救助チームとの通訳も含まれる。

救助チームの活動現場では、軍、武装警察、地元警察が共同で作業しており、現場での作業の段取りや役割分担についてその場で調整する必要性が高かった。今後、同様の場面が想定される場合は、活動開始前における軍・警察本部等との調整やそれぞれの現場責任者の特定などに留意する必要があると思われる。

(11) 現地調達

JDR の現地到着は被災直後ではなかったものの、物流にはまだまだ制限がかかっていた。大きなスーパーがあるような街の規模であったが、賞味期限や鮮度等、食品によっては陳列されていても注意が必要である。

(12) BoO 管理

日ごとにストレスが高まってくるので、BoO 内はできるだけ整理整頓された状態に保って

おきたかったが、業務調整員の執務スペースには、いつも物が多いこともあり雑然としていたことが多かった。隊員のなかから、毎日清掃する提案が出されたが、業務調整員が気づくべきことかもしれない。また、町の規則によりゴミ袋を手に入れることが困難だったため、食事の片付け時には容器を重ねて捨てるよう小隊ごとに連絡すると、幾分ゴミ袋の消費を抑えることができた。食事以外においても、細かい指示に関しては小隊ごとに入れるとうまく流れるような傾向にあった。

派遣中の食事は、隊員の娯楽の一つでもあるので身体的・精神的に大きく作用するものである。現地の食事が合わない・飽きた状態ではやはり日本食の効果が大きく、その出し方や量は考える必要がある。携帯した日本食に飽きると食事量が減ることが予想されるからである。また、同じインスタントの味噌汁でも、一度鍋にあけて生の野菜や乾燥ワカメを足すというひと手間を加えるだけで味は全然違うものになるようで、隊員に好評を得た。ただし、調理に手を掛けようとしすぎて、食事の完成が遅れることがあり、その際現場にいる隊員からは、簡単なものでいいので活動の合間の休憩時間に合わせて食事をとりたいという意見も上がっていた。そのあたりは、一日の隊のスケジュールを把握し、現場と打合せしておく必要があった。

食事においては、各部屋から持ってきた電気ポットが湯沸かしに活躍した。

(13) 指揮班補助

今回の指揮班は、そのほとんどが IER、総合訓練を経験したほか、指揮計画運用研修も一通り受講済みのメンバーであった。そのため JDR の書式や体制についても十分知見があり、INSARAG についても一定の理解があった。ただし、総合訓練で再現しているところとしていないところの知識の差が明確であるため、日ごろの訓練からより現実に即した内容を実施することが重要と思われる。

1) 指揮計画運用研修

指揮計画運用研修の有効性が表れた派遣であったといえる。この研修で一連の流れをカバーシミュレーションすることによって、各局面での動きを確認することができる。また、INSARAG 書式や各副団長が使用する書式への慣れ、チームビルディングという点でも、今後通年で参加を募ることが効果的と考える。

2) INSARAG 担当の配置

INSARAG に関する動向や最新の知識は事務局の担当が一番理解をもっている点や、通常の研修・訓練では再現しきれない部分に指揮本部がうまく対応するためにも、派遣時や訓練の際に INSARAG もしくは連携要員として指揮本部に人材を配置することが望ましい。今回は業務調整員の連携担当として指揮班への INSARAG ルールの説明や補助にあたったが、あくまでも業務調整員という立場上、精神的ストレスも大きかった。

3) 指揮班使用書式（救助チーム携行書式）

POA（Plan of Action：活動計画）については、派遣中の更新、その記載内容も含めて業務内容に適合するよう確認する必要がある。またそれらの更新方法についても、その

タイミングも含め、どのような管理方法がよいのか再度検討の余地があると感じた。

(14) UCC 会議

JDR 訓練では、団長とロジ・連携副団長のみが OSOCC/UCC 会議に参加することになっているが、今回は、上述 2 名に加えて、活動・計画副団長、業務調整員、そして場合によってはメディカルマネジャーやその他 2 名が会議に参加した。会議の性質を考慮すれば、意思決定者とプラス 1 名程度で足りる会議であり、主催者よりは少人数での参加が望ましいとされているが、チームによっては、オペレーションや連携を担当する者がチームを代表して参加している形も複数みられるため、日本も必要性によっては団長以外の者が参加することもあり得るのではないかと感じた。

(15) リエゾン

UCC へのリエゾンの供出は、日本が Heavy チームであるゆえ、今後も Heavy チームへ期待される機能である。今回も INSARAG チームへはリエゾンの提供を求められていたが、すべてのチームが対応をしていたわけではなく、実際に要請に応じなかったチームについては、INSARAG 側は今後の対応のためにも記録を残していた。

今回は、カトマンズ盆地外の広範囲に USAR チームが展開し、セクター・コーディネータが設置されたことをきっかけに、リエゾンの提供について UCC から要請があった。しかし、この時点では USAR フェーズの終盤であり、JDR が UCC へリエゾンとして参加した段階ではコアな業務はなく、UCC 内の携行物の整理や会議の配布資料を揃える程度の作業であった。セクター・コーディネータの下で展開している各チームの活動内容については、OSOCC 自体にもチームリーダーズミーティングまで情報が入ってこない状況であった。このような状態の下、自チームのための情報収集や効果的なリエゾン機能という本来の役割を果たすことは困難であったが、UCC マネジャーに調整内容の詳細について共有を得る等、今後の活動や国内の研修の材料として大きな収穫となった。

本来、UCC へのリエゾンは日本チームが UCC に対して何らかの要求や情報収集が必要になった際には大変有効に作用する機能である。

一方、リエゾンを出す場合には業務調整員の増員が不可欠であると考えられる。UCC のリエゾンがどんなに情報収集や共有を効率的に行っても、チーム内で対応できる業務調整員がいなくなってしまうとその効果は失われる。一方で、UCC にリエゾンを出すことによってチーム内の連携担当の負担は減るため、一般的な VO の使い方や INSARAG の枠組みへの理解がある者がチームに残れば問題は削減される。

(16) USAR 調整セル (UCC)

今回の派遣では、実践では初めて UCC が設置され、オランダがリードをとる形で運営が行われた。UCC の構造としては、オランダのほかに、OCHA の FCSS (Field Coordination Support Section : フィールド調整支援課) から UCC リーダー、ROAP (Regional Office for Asia and the Pacific : OCHA アジア太平洋地域事務所) から UCC マネジャーが出ているほか、UNDAC メンバー 1 名、MapAction 2 名、米国の TF (Task Force : タスク・フォース) 1 と TF2 からそれぞれ 2 名が配置されており、USAR 活動の取りまとめはオランダと米国チームが中心となっ

て行われていた。

UCC に関連する訓練は INSARAG 地域演習等にも既に盛り込まれており、各国チームにも UCC に関する知識や訓練経験があったことに加え、INSARAG チームに UNDAC や OSOCC の訓練を受けた連携要員を置くことが求められていることから、初めての設置にもかかわらず UCC の活動全体はスムーズであったといえる。日本チームが UCC に入った際も、いわゆる暫定 OSOCC と基本的には同じ機能であることから、違和感なく作業にあたることができた。こういった点で平時に行われている INSARAG 訓練や日本の訓練効果はあると確認できた。

ただし、今回 UCC は日本に ASR2 のセクターとして K を提示したのち、同区域内に新しくセクター（セクターP）を作成し、日本への通知なしに他チームに活動の依頼を出す、といった粗さも見受けられた。この結果、日本が実施していた ASR2 の作業が重複し、本来の強みである作業の効率性が損なわれてしまった。この点については、各チームへの情報共有不足として、UCC ヘリエゾンとして参加した際に直接 OCHA 側に言及し、UCC の今後の改善事項として盛り込まれることになった。また、JDR チームから共有を受けた各国が残すマーキングが一致していない点、直接 UCC にフィードバックをしたうえで、新ルールの周知についてもアドバイスを出したため、今後の改善につなげることができたのではないかとと思われる。

(17) その他

1) 業務調整員の人数増員の検討

本派遣では、日本チームから UCC へのリエゾン派遣を求められ、業務調整員を派遣した。USAR 活動における国際連携の枠組みが徐々に整備されてきている昨今の状況下、今後も国際連携を行う OSOCC 等へのリエゾンの派遣等、これまで想定していない人員の派遣が想定される。また、現場活動における支援（食事の提供等）のため、現場活動への業務調整員の派遣も行った。

これらを踏まえ、現在の救助チームの標準編成（70 名、うち業務調整員 7 名）が適正であるのか、確認が必要であると感じる。

2) 複数の通信手段の確保（固定電話、現地・日本の携帯電話）

本派遣においては、ホテルに設置した指揮所に固定電話を開設し、現地携帯電話及び事務局から持参した国際携帯電話を併用して、本部との連絡を行った。現地と本部との連絡の重要性及び被災直後の環境下での不安定な通信事情にかんがみ、複数の通信手段を確保し、状況によって使い分けることが有用である。

3) 業務調整員以外からの支援の活用

業務調整員は、ロジ全般を担当し、指揮班や救助隊員等が、チーム派遣の目的である捜索・救助活動に集中できる環境を整えることが重要である。

多くのマンパワーが必要な作業が発生した場合には、遠慮することなく、救助隊員等に支援を求めることがチーム全体の目的達成に寄与する。

上記のような考え方は、通常期における訓練・研修、または派遣直前の結団式等におい

て強調し、事前に共通認識をもっておくことが有効である。

4) 活動開始前の情報収集（調整要員の加入）

救助活動の特徴として事前の現地状況の把握に係る時間が限定されているため、救助が必要な場所・被害状況・他チームの活動などを活動前に迅速に把握するのは困難である。各国のチーム（USAR）が必要な情報を先着の救助チームが到着時に提供できれば活動が効率的に開始できるが、今回はその役割・機能が必ずしも果たせておらず、最初の活動場所の特定などが日本大使館や JICA 事務所の情報により行われた。このため、状況が許す限りにおいて、活動開始時には、①被災国政府側のカウンターパート機関の特定・コンタクト先確保（今回は警察が実質的な情報提供機関）、②同機関からの被災地情報・活動地の情報収集、及び③活動候補地における周辺住民等からの効率的な基礎情報収集活動、が必要である。このような調整活動を行うチームメンバーは必ずしも現在のチーム構成に想定されていない印象であり、効果的な救助活動を行うためにも上記情報収集や調整を行う 2、3 人の要員をメンバーに加えることが必要と考える。

5) 軍・警察との効率的な作業分担・調整（共同作業先の能力）

活動現場では、軍、武装警察、地元警察等が入り乱れて作業しており、どのような統制形態をとり、何時間の活動を行うかなど作業の調整を行う必要があった。結果的にそれぞれの機関が日本チームに協力的で作業自体に大きな支障はなかったが、軍・警察部隊の作業が必ずしも調整されておらず、日ごとに異なるチームが派遣され、前のチームとの引き継ぎが十分でなく同じ説明を日本チームから行う場面があった。

6) 救助チームの意思決定（効率的なロジ）

上記のような現地状況であったため、救助チームの活動は候補地選定及び活動予定について困難な場面が何度かあり、そのため活動に必要な車両、通訳、食事等の手配を柔軟に行う必要があった。特に通訳については、現場活動の調整に不可欠であったものの、供給逼迫のせいか、時間の予約等に相応の労力を有した。災害状況の環境にかんがみれば、救助チームは現場の情報等に基づきその都度柔軟に意思決定をする必要があることは理解しつつ、毎回の活動方針・内容・スケジュールについては、可能な限り前広に決定することが望ましく、必要なロジ業務を効率的に行う必要がある。

7) その他

- ・今回、医療チームや自衛隊チームもほぼ同時に現地入りし、活動を開始したこともあり、メディアからはこの 2 チームの活動状況を救助チームの業務調整員に質問してくるケースが何度かあった。日本チームとして、事前に他チームの活動状況を確認し、個別に対応していたものの、チームごとの活動をより適時に把握し、ネパール政府側に必要な情報を提供できる態勢を考慮する必要があると感じた。
- ・指揮本部と業務調整員との意思疎通は構築されていたが、救助隊員と業務調整員間では改善の余地があると感じた。これは、業務調整員の業務と救助隊員が直接的にかかわらないことが原因と考える。活動での必要資機材、車両台数（ドライバー含む）、人

員把握（食事関係）等の調整に必要な情報を共有することによってスムーズな支援態勢を構築することができる。この役目は救助隊員に近い資機材担当が適任である。

付 属 資 料

1. 活動日程
2. メンバーリスト
3. ネパール政府感謝状
4. 各国救助チーム活動地域（4月29日時点）
5. 活動日報
6. INSARAG Post Mission Report

1. 活動日程

活動日程（時間表記は日本時間）

日順	日 付		チーム活動
1	4月25日	土	15:11 カトマンズ北西約80kmで地震発生（M7.8） 21:58 ネパール政府より救助チーム派遣要請接到 23:50 国際緊急援助隊救助チーム派遣決定
2	4月26日	日	17:52 救助チーム成田発
3	4月27日	月	バンコクにて乗り継ぎ
4	4月28日	火	11:44 現地到着 ダルバール広場にて捜索救助活動開始
5	4月29日	水	ダルバール広場での活動継続、ご遺体1体収容
6	4月30日	木	ダルバール広場での活動継続、セクターKにてASR2実施。
7	5月1日	金	サクーでの活動開始、ASR2継続
8	5月2日	土	サクーでの活動継続、ASR2継続
9	5月3日	日	ゴンガブでの活動開始
10	5月4日	月	ゴンガブでの活動継続
11	5月5日	火	ゴンガブでの活動継続
12	5月6日	水	BoO（Base of Operation）にて活動待機
13	5月7日	木	現地政府への報告、帰国準備
14	5月8日	金	13:55 ネパール出発
15	5月9日	土	6:07 成田着

2. メンバーリスト

国際緊急援助隊救助チーム隊員（70名）

No.	氏名				所 属	
1	小林	成信	Shigenobu	Kobayashi	外務省国際協力局緊急・人道支援課	団長
2	山下	桂一	Keiichi	Yamashita	警察庁長官官房国際課	副団長
3	鳥枝	浩彰	Hiroaki	Torieda	消防庁予防課危険物保安室	副団長
4	稲葉	健人	Takehito	Inaba	海上保安庁警備救難部救難課	副団長
5	山根	誠	Makoto	Yamane	国際協力機構	副団長
6	杉浦	嘉信	Yoshinobu	Sugiura	警察庁	通信班
7	松尾	信輔	Shinsuke	Matsuo	警察庁	通信班
8	山川	良博	Yoshihiro	Yamakawa	警視庁	ハンドラー
9	大牟田	義貢	Yoshitsugu	Omuta	警視庁	ハンドラー
10	相田	秀久	Hidehisa	Aita	警視庁	ハンドラー
11	伊藤	正則	Masanori	Ito	警視庁	ハンドラー
12	野口	朝大	Tomoo	Noguchi	警視庁	ハンドラー
13	清水	邦彦	Kunihiko	Shimizu	警視庁	中隊長
14	大場	雄次	Yuji	Ohba	警視庁	中隊長サポート
15	澄川	敏康	Toshiyasu	Sumikawa	警視庁	小隊長
16	杉本	健太	Kenta	Sugimoto	警視庁	救助隊員
17	原子	暁	Satoru	Harako	警視庁	救助隊員
18	栗原	誠	Makoto	Kurihara	警視庁	救助隊員
19	森嶋	大介	Daisuke	Morishima	警視庁	救助隊員
20	三浦	基史	Motofumi	Miura	警視庁	救助隊員
21	藤井	聡	Satoshi	Fujii	警視庁	救助隊員
22	高橋	弘樹	Hiroki	Takahashi	警視庁	救助隊員
23	酒井	敦志	Atsushi	Sakai	神奈川県警察	救助隊員
24	森	慎次	Shinji	Mori	神奈川県警察	救助隊員
25	菅原	琢磨	Takuma	Sugawara	神奈川県警察	救助隊員
26	藤谷	久和	Hisakazu	Fujiya	神奈川県警察	救助隊員
27	加藤	理道	Takamichi	Kato	神奈川県警察	救助隊員
28	萩森	義男	Yoshio	Hagimori	東京消防庁	中隊長
29	野呂瀬	亮一	Ryoichi	Norose	東京消防庁	中隊長サポート
30	伊藤	聖悦	Seietsu	Ito	東京消防庁	小隊長
31	角田	実	Minoru	Kakuta	さいたま市消防局	小隊長
32	寺田	秀明	Hideaki	Terada	東京消防庁	救助隊員

33	渡邊	純一	Junichi	Watanabe	東京消防庁	救助隊員
34	前田	祥吾	Shogo	Maeda	東京消防庁	救助隊員
35	岩田	俊	Takashi	Iwata	さいたま市消防局	救助隊員
36	大島	豊	Yutaka	Oshima	さいたま市消防局	救助隊員
37	石塚	武	Takeshi	Ishizuka	浜松市消防局	救助隊員
38	松尾	晋明	Nobuaki	Matsuo	浜松市消防局	救助隊員
39	濱井	健司	Kenji	Hamai	浜松市消防局	救助隊員
40	岩本	逸人	Hayato	Iwamoto	川越地区消防局	救助隊員
41	吹谷	謙和	Norikazu	Fukiya	秋田市消防本部	救助隊員
42	平崎	良典	Yoshinori	Hirasaki	高崎市等広域消防局	救助隊員
43	吉田	昌司	Masashi	Yoshida	富山市消防局	救助隊員
44	田尻	智克	Tomokatsu	Tajiri	羽田特殊救難基地	小隊長
45	村上	大輔	Daisuke	Murakami	羽田特殊救難基地	救助隊員
46	坂上	悠	Yu	Sakaue	羽田特殊救難基地	救助隊員
47	川田	匡剛	Tadayoshi	Kawata	羽田特殊救難基地	救助隊員
48	橋本	翔太	Shota	Hashimoto	羽田特殊救難基地	救助隊員
49	宮下	雅充	Masamitsu	Miyashita	羽田特殊救難基地	救助隊員
50	徳永	悠希	Yuki	Tokunaga	横浜海上保安部巡視船いさづ	救助隊員
51	嶋袋	伊一	Iichi	Shimabukuro	鳥羽海上保安部巡視船いさづ	救助隊員
52	伊達	紀昭	Noriaki	Date	呉海上保安部巡視船くろせ	救助隊員
53	河村	太輔	Taisuke	Kawamura	福岡航空基地	救助隊員
54	坂田	茂伸	Shigenobu	Sakata	境海上保安部巡視船おき	救助隊員
55	後藤	領	Ryo	Goto	鹿児島航空基地	救助隊員
56	西川	輝彦	Teruhiko	Nishikawa	那覇航空基地	救助隊員
57	杉田	学	Manabu	Sugita	順天堂大学医学部附属練馬病院	救急医療
58	苛原	隆之	Takayuki	Irahara	日本医科大学救急医学教室	救急医療
59	沢本	圭悟	Keigo	Sawamoto	札幌医科大学医学部救急医学講座	救急医療
60	谷	暢子	Masako	Tani		救急看護
61	山口	直樹	Naoki	Yamaguchi	社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会千里病院	救急看護
62	高橋	勇	Isamu	Takahashi	(株)構造コンサル東日本	構造評価専門家
63	一條	典	Tsukasa	Ichijo	(有)構造設計舎	構造評価専門家
64	神内	圭	Kei	Jinnai	国際協力機構	業務調整員
65	村上	淳	Jun	Murakami	国際協力機構	業務調整員
66	山崎	泰正	Yasumasa	Yamazaki	国際協力機構	業務調整員
67	江崎	晴香	Haruka	Ezaki	国際協力機構	業務調整員
68	中野	照人	Teruhito	Nakano	(公社)青年海外協力協会	業務調整員

69	井川	太士	Taishi	Ikawa	(公社) 青年海外協力協会	業務調整員
70	渡辺	大介	Daisuke	Watanabe	(公社) 青年海外協力協会	業務調整員

国際緊急援助隊隊員 (1名)

No.	氏名			所属		
1	松本	勝男	Katsuo	Matsumoto	国際協力機構	業務調整員



GOVERNMENT OF NEPAL
MINISTRY OF HOME AFFAIRS



Singha Durbar
Kathmandu, Nepal.
May 3, 1015

Ref No.: 329

Date:

Subject: International USAR Coordination and Support

To: UN OCHA
Kathmandu, Nepal

The Government of Nepal thanks all international urban search and rescue teams and the UN OCHA INSARAG Secretariat for their rapid and generous response to the earthquake which struck Nepal on 25 April 2015. The Government would like to record its sincere appreciation for your efforts which have resulted in the saving of 16 lives.

We would like to inform you that, one week after the earthquake day, the CNDRC, an apex policy Government body headed by Honorable Deputy PM and Home Minister, has decided to further mobilize the national strength for the Search and Rescue and to request the USAR Team to arrange their exit plan, since the international USAR Phase should now be closed from May 3, 015.

We would like to thank the OSOCC for coordinating the USAR Teams and express our appreciation and thanks for your efforts.

Yours Sincerely,

Rameshwor Dangal
National Disaster Focal Point
Joint Secretary

(仮訳)

ネパール政府
内務省
ネパール国カトマンズ

2015年5月3日

参照番号 329

国際搜索救助調整と支援について

宛先： 国連人道問題調整事務所 (OCHA)
ネパール国カトマンズ

ネパール政府は、2015年4月25日に発生した地震に迅速に対応し、多大な支援を提供して下さった全ての国際都市搜索救助チームと国連人道問題調整事務所の INSARAG 事務局に深く御礼申し上げます。皆様の支援とお力のお陰で16名の命が救われたことに深謝いたします。

地震発生から一週間が経過し、我が国の副首相兼内務大臣が率いる中央災害救援委員会 (CNDRC) は、国際 USAR フェーズの終了を5月3日に決定致しました。今後はより多くの国内の搜索救助チーム (能力) を動員し対応していきます。同時に、国際 USAR チームにおいては撤収の準備をして頂くようお願い申し上げます。

OSOCC における USAR チームの調整、そして OCHA の支援と努力に深く御礼申し上げます。

敬具

国家災害対策フォーカルポイント
局長/局次長
Rameshwor Dangal (署名)



GOVERNMENT OF NEPAL
MINISTRY OF HOME AFFAIRS

Singha Durbar
Kathmandu, Nepal.

Ref No.: 330

Date:

May 3, 2015

APPRECIATION LETTER FROM GOVERNMENT OF NEPAL

To

Subject: Appreciation for Your Efforts

The Government of Nepal would like to thank and place on record its very sincere appreciation for your efforts in assisting us in the search and rescue for victims trapped under collapsed structures, after the earthquake of 25 April 2015.

The Government of Nepal is grateful to your team for travelling to Nepal and your efforts to help us in this time of need for our country. The people of Nepal will always remember your contribution to us at this time.

With many thanks and wishing you safe travel home,

Your sincerely,

Rameshwor Dangal

National Disaster Focal Point

Joint Secretary

(仮訳)

ネパール政府
内務省
ネパール国カトマンズ

2015年5月3日
参照番号 330

ネパール政府より感謝状

ネパール政府は、2015年4月25日の地震発生から今日まで、倒壊建物の下に閉じ込められた要救助者の捜索救助活動を支援下さった皆様に深く御礼申し上げます。

我が国が支援を必要としている時に、貴救助チームがはるばるネパールまで来て下さったことに深く感謝致します。ネパール国民は皆様の支援、貢献を忘れません。

御礼と共に、皆さまが安全にご帰国なされることをお祈りしております。

敬具

国家災害対策フォーカルポイント
局長／局次長
Rameshwar Dangal (署名)



GOVERNMENT OF NEPAL
MINISTRY OF HOME AFFAIRS

Singha Durbar
Kathmandu, Nepal.

Ref No.: 350

Date:

03 May 2015

APPRECIATION LETTER FROM GOVERNMENT OF NEPAL


To: Japan Disaster Relief Team

Subject: Appreciation for Your Efforts

The Government of Nepal would like to thank and place on record its very sincere appreciation for your efforts in assisting us in the search and rescue for victims trapped under collapsed structures, after the earthquake of 25 April 2015.

The Government of Nepal is grateful to your team for travelling to Nepal and your efforts to help us in this time of need for our country. The people of Nepal will always remember your contribution to us at this time.

With many thanks and wishing you a safe travel home.

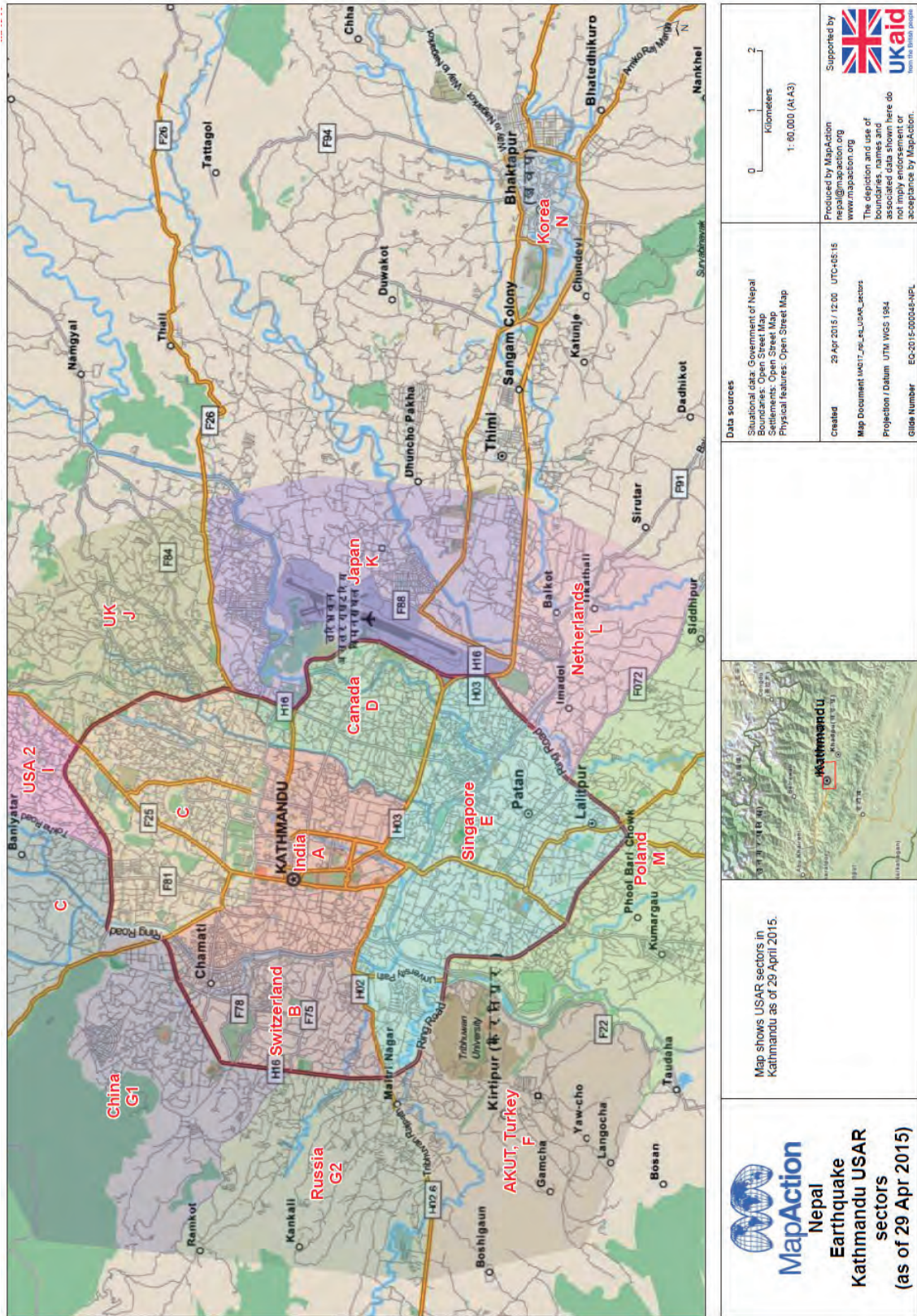

Yours sincerely

Rameshwor Dangal

National Disaster Focal Person

4. 各国救助チーム活動地域（4月29日時点）

(MapAction 作成)



5. 活動日報

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

4月28日 第1報

1. 本日の活動

時間（すべてネパール時間）	活動内容
6時30分（タイ時間）	指揮班ミーティング
6時45分（〃）	全体ミーティング
10時（〃）	TG3199便にてバンコク出発、空港内にて日本、タイ等の複数社による団長他プレス取材
11時45分	カトマンズ トリブバン空港到着 入国前に全体ミーティング 団長他プレス取材（空港出口） 幹部数人は国連 RDC（受入出発センター）登録後、国連のコーディネータ（OSOCC）と活動場所について打合せを実施、その後ホテルに戻り本隊と合流 幹部以外の隊員は、宿泊場所のエベレストホテルに移動
14時30分	調査チーム（団長含む）により、カトマンズ市内の建物崩落現場を複数回って情報収集を実施 調査チームは、カトマンズの旧王宮（ハヌマン・ドカ）周辺の予備調査を実施し、周辺寺院にて本調査（行方不明者の捜索）を実施することを決定。ホテルで待機中の隊員も、旧王宮に向かう予定
15時00分	捜索救助活動開始。BoO（Base of Operation）にて適宜、山下副団長が取材を受ける。
17時00分	捜査犬による調査は終了し、隊員による調査を開始
17時15分	指揮班ミーティング
18時00分	OSOCC 会議（団長等参加）
18時40分	捜索救助活動終了
21時	指揮班ミーティング
21時30分	全体ミーティング

2. 特記すべき活動

- ・ 昨日、ネパール入りできず、バンコクに引き返したが、本日はほぼ到着予定時刻に着陸でき、ネパール入りすることができた。さっそく、地元の軍や警察の救助活動の支援に入りレッキ（偵察、調査）などを行った。
- ・ クリシュナマンディール寺院が全壊。隣接のホテルより男女2名が救出されたが、もう2名が残っている可能性があるとの情報があり、当地を捜索。

- ・ OSOCC 会議にてカトマンズより 1 時間南下したところにサイトがいくつか挙げられていた。
- ・ 援助隊カーゴについては、別途航空便で来る予定であるところ、現在対応中。

3. 被災情報

- (1) 発生日時：2015 年 4 月 25 日 12 時ごろ（現地時間。日本時間同日 15 時 15 分ごろ）
- (2) 発生場所：ガンダキ県ラムジュン郡（首都カトマンズより北西約 80km）
- (3) 発生状況：震源のラムジュン郡を中心にネパール全土、さらには周辺国でも揺れを観測。マグニチュードは 7.8〔米国地質調査所（USGS）の最新の発表〕
- (4) 死者：4,350 名（現地時間 28 日 18：00 のネパール政府発表）
（地元紙は、災害当局者の話として死者が 8,000 人に達する可能性ありと報道）
- (5) 負傷者：8,063 名（現地時間 28 日 18：00 のネパール政府発表）
- (6) 被災状況：カトマンズ市内ではかなり大きな建造物の倒壊が各所で確認され、道路も各所で寸断されている。銀行・商店等の一部で営業を再開しているが、食料の販売は在庫を取り崩している。ホテルのなかには、燃料備蓄が十分ないことを理由に予約をキャンセルする例もある模様。電気・水道の供給は不安定になりつつあり、停電は広範囲にわたり続いている。テレビの視聴は可能になったが、携帯電話はつながりにくいか、または音声が届き取りにくい状況が続いている。インターネットは依然不通。空港は、各国から緊急援助のための軍用機等が多数発着し、この影響で民間航空機の発着に遅延やキャンセルが頻発している。余震が依然続いている。
- (7) ネパール政府は 25 日、非常事態宣言を発出するとともに、国際社会からのあらゆる形の人道援助を要請するアピールを決定。これを受け、日本政府は同日、国際緊急援助隊（JDR）の派遣を決定、26 日に成田出発。

4. 隊員の健康状態等

- ・ 水、電気は問題ない。ホテルも時折停電となるものの問題なし。
- ・ 本日、Wi-Fi 環境悪い。
- ・ インターネットは不安定。
- ・ ホテルは 2 人部屋で、シャワーは問題ない。レストランも通常営業で夜は全員レストランで夕食。
- ・ 隊員の健康状態に問題なし。

5. メディア取材対応

- ・ 空港到着時に多数のメディアより取材を受け、団長対応。
- ・ 明日 11 時に、小林団長が活動現場で記者会見を行う予定（活動現場に国内外のメディアが殺到し、活動に支障を来す、または危険を伴う取材をしがちであるため）。

6. 明日の活動予定

- ・ 8 時 OSOCC 会議（活動地域割り当て）
- ・ OSOCC 会議後、幹部会議にて活動方針検討

- ・ 11時 ヘルスクラスター会議
- ・ 18時 OSOCC 会議（活動報告）
- ・ 引き続き地元の救助活動支援。UCC（国際捜索救助チーム調整セル）から活動が与えられれば、随時展開。

以 上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

4月29日 第2報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
7時16分	前日から継続中の活動サイトであるクリシュナマンディール寺院に向け、2中隊ホテル出発
7時30分	OSOCC 会議に向け出発〔小林団長、杉田メディカルマネジャー（MM）、山根副団長、江崎業調、西谷書記官〕
7時35分	2中隊サイト到着、搜索救助活動開始。境界テープによるゾーニング、指揮所設置
7時45分	ドッグサーチ実施、反応なし
8時00分	OSOCC 会議にて各国調査隊の地域エリア割り当て。結果、日本の緊急援助隊はバクタプール及びその北部のエリア（セクターK）に決定
8時30分	レッキ実施、現場活動開始
8時49分	3小隊活動終了、ホテルへ帰投
9時10分	OSOCC 会議結果報告指揮班ミーティング
10時31分	2小隊がバクタプールに向け、ホテル出発
9時50分	1小隊サイト（クリシュナマンディール寺院）到着、活動開始
10時30分	4小隊活動終了、ホテルへ帰投
11時00分	団長がクリシュナマンディール寺院にてぶら下がり取材実施
11時5分	3小隊サイト（クリシュナマンディール寺院）到着、活動開始
12時00分	4小隊サイト（クリシュナマンディール寺院）到着、活動開始
13時05分	1小隊サイト（クリシュナマンディール寺院）到着、活動開始
13時47分	4小隊活動終了、ホテルへ帰投
13時55分	3小隊サイト（クリシュナマンディール寺院）到着、活動開始
14時20分	2小隊活動終了（バクタプール）、ホテルへ帰投。レッキ活動3カ所で実施。余震による建物崩壊による2次災害の危険性が高く、活動困難と結論
14時49分	クリシュナマンディール寺院にて要救助者1名発見
14時56分	医師により死亡確認
15時03分	1小隊活動終了、ホテルへ帰投
15時15分	ご遺体搬出完了
15時17分	団長、山下副団長クリシュナマンディール寺院に向けホテル出発
15時25分	ご遺体の軍関係者への引き渡し完了
15時35分	団長、山下副団長クリシュナマンディール寺院到着
15時53分	1小隊活動終了、ホテルへ帰投
15時55分	1小隊がバクタプールに向け、ホテル出発
16時00分	コイララ首相とラナ参謀総長（アーミーチーフ）が、日本の緊急援助隊が

	捜索を実施しているクリシュナマンディール寺院の視察を実施する予定（小川大使もクリシュナマンディール寺院に合流）であったが、急きょ予定変更により視察は中止。団長がクリシュナマンディール寺院にてぶら下がり取材実施
16時45分	2小隊がバクタプールに向け、ホテル出発
18時00分	OSOCC会議
18時10分	捜索救助活動終了
19時00分	ホテルにおいて団長がプレス会見取材実施
19時30分	指揮班ミーティング
21時00分	全体ミーティング

2. 特記すべき活動

➤ 4月29日朝8時のOSOCC会議の報告

- ・ USAR（都市型捜索救助）によるこれまでの生存者発見状況（中国2名、インド12名）
- ・ 今後のUSAR活動は、生存者発見から遺体発見へ移行。
- ・ クリシュナマンディール寺院が全壊。隣接のホテルを第1中隊が捜索中。
- ・ JDRにはセクターKが割り当てられた。大きなカトマンズ盆地で、郊外。東西7km、南北5kmほどの地域〔人口密集地のバクタプール、2番目に大きい街ティミ（Thimi）〕が割り当てられ、ASR2活動を行う予定。1個中隊が捜索に向け出発。
- ・ ネパール政府側からは、余震は治まっており今後は生活全般の立て直しが重要、毛布やテントといった物資は引き続き要するとの発言があり、次のフェーズへの移行期となるのではとの見解。

➤ 4月29日18時のOSOCC会議の報告

- ・ 各セクターを担当するUSARチームからASRの結果報告。生存者救出はなし。遺体発見もゼロもしくは数名程度のチームが多い。
- ・ UNDAC（国連災害評価調整チーム）は4月30日までに全セクター（エリア）のアセスメント終了をめざしている。
- ・ 4月30日のOSOCC会議ではデモビ計画が取り上げられる予定。

➤ プレス会見

- ・ 各局の報道が過熱し、隊員の活動に支障を来すため、サイトの規制ラインを設置するとともに、毎日、11時及び19時に記者を集めてのぶら下がり取材を実施することとした。

➤ 救助チームの活動期間について

- ・ ネパール政府は、救助のステージは終わり、次のステージに移るという認識。
- ・ 割り当てられたセクターKのうち、主要都市であるバクタプール、ティミ内の3カ所においてセクターアセスメントを実施した結果、いずれもれんが造りの建造物で余震による倒壊リスクが極めて高く、捜索を開始した場合の安全対策を講じることが困難であるた

め、捜索救助対象とすることは困難であるとの結論に至った。住民からは同行した軍関係者に対して遺体捜索よりも物資供与などの生活支援への要望あり。

3. 被災情報

- (1) 死者数：4,350名超
- (2) 行方不明者数：800万名
- (3) 負傷者数：8,170名超
- (4) 損壊家屋数：64万軒
- (5) 救助者：14名（各国からのUSARチームにより救出された人数）
- (6) 避難所：16カ所
- (7) インフラへの被害（道路、橋梁、空港、通信、電気、水道等）：
 - ・ カトマンズ国際空港は24時間で運営中。航空機が空港混雑のため時間どおりに着陸できない状況が続いている。
 - ・ 多くの道路に被害が発生。複数の救援チームが動員されているが、移動とロジが課題。
 - ・ 電気は1日12時間のみ使用可能。多くの住居などは発電機使用。燃料が限られている。
 - ・ 携帯電話は復旧の方向にあり。ケーブルのインターネットは使用可能。固定電話は途切れ途切れだか、つながる状況。空港、カトマンズ市内のインターネットは不安定。
 - ・ 経済的損失は約50億円と伝えられている。
 - ・ 銀行は閉鎖、ATMは稼働中。現金が少ない。
 - ・ 多くの被災者が被害の少なかった地域の親族の下へ移動している。
- (8) 医療施設への被害及び公衆衛生の状況：病院は混乱状態で、余震も続き、道端で患者の治療が行われている姿が見受けられる。Ramechapp、Nuwakot、Sindhupalchowk、Gorkhaの医療機関の最大90%が甚大な被害を受けている。

4. 隊員の健康状態等

手作業による重労働が続いているため、疲労がたまりつつあると思われるが、特に病気やけがの情報はない。

5. メディア取材対応

テレビ、新聞各社、現地報道機関数社等

6. 明日の活動予定

4月30日の活動は、①クリシュナマンディール寺院の捜索活動の最終作業(1,2中隊投入)、②同寺院近辺でのネパール軍によるサイトへのリサーチ活動支援（犬及び探知機のみ）、③各小隊から1名ずつ選抜したチームによるセクターKのアセスメントを実施予定。

以 上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

4月30日 第3報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
7時20分	前日に引き続き、カトマンズ市内のハヌマン・ドカ/ダルバール広場（セクターA）のクリシュナマンディール寺院で救助捜索活動を開始
8時00分	団長以下、ネパール政府及び国連主催の調整会議（OSOCC会議）に出席。その後、本日の活動方針決定
9時00分	隊員、機材確認
9時10分	指揮班ミーティング
9時30分	団長が香港のテレビ局より取材を受ける。
10時10分	古都バクタプール（日本に割り当てられたセクターK）にて ASR 活動を開始
13時35分	セクターKでのASR活動、午前中の活動を終了
15時15分	ネパール軍とも調整し、セクターAで担当していたサイトの捜索救助活動は完了と判断した。要救助者の発見はなし。団長がネパール軍司令官（大尉）との終了確認実施
15時55分	セクターKでの午後のASR活動を再開。今現在も活動続行中
16時30分	団長が在ネパール小川大使訪問（於：日本大使館）
18時00分	OSOCC会議出席
19時	団長記者ブリーフ（於：宿舎）
20時	団長、ニュージーランド外務省職員との意見交換（於：宿舎）
20時30分	指揮班ミーティング
21時30分	チーム全体ミーティング
22時00分	指揮班ミーティング再開

2. 特記すべき活動

➤ 4月30日朝8時のOSOCC会議の報告

- ・ 昨日到着したアラブ首長国連邦やタイなどのように、依然として各国の救助チームが入ってきている状態。国連人道問題調整事務所（OCHA）によれば61のINSARAG（国際捜索救助諮問グループ）認定チームがネパール入りしている。
- ・ ネパール政府は、既に「救命・救助」の時期は終わり、遺体回収の段階にあると認識。同政府内務省は遺体回収活動を実施できないチームについては、撤収準備/計画を立てるよう勧告。
- ・ 一方で、構造評価専門家によるカトマンズ市内の建築物の安全評価などのニーズがある。
- ・ 今後のニーズは、遺体回収、瓦礫処理、構造評価、医療。
- ・ 小林団長からは、現在割り当てられている地区でのASR2活動をはじめ、予定していたこ

とはやりきる旨発言。

- ・ 撤収予定のチームの有無につき問われたが、手を挙げるチームなし。
- 搜索救助活動
- ・ セクターAでは4個小隊が順番で、1時間ずつ活動。
 - ・ セクターAにおいて、地元警察の救助隊員が活動中、右手親指の爪に木片が刺さりけが。苛原先生が必要な医療処置を実施した。加えて、左手の薬指にけがをした方も苛原先生が手当した。同じくセクターAで右手切り傷を負った軍人を、山口看護師が手当した。
 - ・ ハヌマン・ドカ地区での活動（クリシュナ寺院での搜索救助活動、マジユデワル寺院及びバサンプール・タワーでの搜索活動）を完了し、団長が警察現場責任者へ報告を行った。
 - ・ 一方、各小隊から1名ずつ、稲葉副団長を筆頭に、セクターKにおけるASR活動を開始した。救助犬も導入。空港周辺及び以東の5カ所でASR2調査実施、ティミに至る道路周辺及びサクー（Sankhu）でASR1調査実施。
- 構造評価
- ・ ハヌマン・ドカ地区を搜索中の軍搜索チームから要請があり、当チーム構造物専門家が被災した旧王宮建築物の耐震性を評価した。
 - ・ エベレストホテル（救助チーム拠点）に避難して活動中のJICAネパール事務所員に対して、当チーム構造物専門家が同事務所の耐震性について説明を実施した。
- 18時のOSOCC会議の報告
- ・ ネパール政府より、既に搜索活動最終段階のASR5のフェーズ（遺体回収とマーキング活動）にあるとの宣言があったが、どこまでやるのかについては、明確な決定、ネパール政府とINSARAG間での合意がなされていない。
 - ・ 一方で、これまで活動報告書を提出するよう、所定のフォームが渡された。その報告書には、撤収計画について記載する欄があり、近日中にその集計が出ることと予想される。
 - ・ 5月1日朝のOSOCC会議で、現状に関する情報共有、要請を再度確認する。
- 救助チームの活動期間について
- 本日、ネパールと米国の合同チームなどが生存者を発見したことなどもあり、活動を終了して撤収するのは時期尚早と判断。5月2日まで活動を続け、5月3日に帰国の途に就く可能性も念頭に置きつつ、実際の撤収時期につき検討する。

3. 被災情報

- (1) 死者数：5,006名
- (2) 被災者数：800万名
- (3) 避難者数：280万名
- (4) 負傷者数：1万196名
- (5) 損壊家屋数：全壊3,673軒、半壊7,700軒

被害の全容は分かっていないが、全壊家屋は7万軒、一部損壊家屋は53万軒にのぼると予想される。被災者の多くは、被害の少なかった地域に住む親族の家に避難。

(6) USARによる本日の生存者発見状況：米国1名、ノルウェー1名

4. 隊員の健康状態等

隊員の食欲が落ちているが、特に目立った体調不良等はない。

5. メディア取材対応

- ・ テレビ、新聞各社、現地報道機関数社等
- ・ 団長がホテルでぶら下がり取材を実施し、活動概要を共有。構造評価の一條さんも朝日のインタビューに対応。

6. 明日の活動予定

- ・ 8:30 OSOCC 会議
- ・ 8:00 サクーへ ASR2 受入調査を開始
- ・ 18:00 OSOCC 会議

7. その他

- ・ サクーでの ASR2
- ・ 資機材整備
- ・ 空港への資機材引き取り

基本的には、8時のOSOCCでの情報を受けて、本日(5月1日)の捜索・救助活動方針が決められる予定。捜索を実施する場合は、29日及び30日にエリアサーチをした日本担当のセクターKの範囲、調整会合での要請状況等を踏まえて検討するとの由。

以 上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

5月1日 第4報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
8時10分	一部の隊員（構造含め5～6名）がサクー（カトマンズ市街地から東へ約20km）にてレッキのためホテルを出発
8時15分	幹部 OSOCC 会議に向けて BoO 出発
8時30分	OSOCC 会議
8時58分	サクー地区着、レッキ開始
9時05分	ASR2 実施。ASR3 実施予定場所確認
10時10分	幹部等 OSOCC 会議より帰隊、指揮班ミーティング
10時32分	サクー地区レッキ BoO 着
12時00分	全部隊出動
13時20分	1中隊、2中隊活動開始
13時40分	中隊長、中隊長サポ レッキ開始
14時05分	レッキ終了、武装警察（Armed Polics Force : APF）幹部（カトマンズと地元警察）と団長との意見交換
14時45分	1中隊、2中隊 休憩開始
14時49分	ドッグサーチ開始
15時00分	反応なし、ドッグサーチ終了
15時10分	1中隊、2中隊 活動再開
16時00分	1中隊、2中隊 活動停止
16時20分	指揮班 サイト出発
16時40分	部隊 サイト出発
18時00分	OSOCC 会議
19時30分	団長プレス会見及びぶら下がり取材
20時00分	指揮班ミーティング
21時30分	全体ミーティング

2. 特記すべき活動

➤ 5月1日8時30分のOSOCC会議の報告

- ・ 救助フェーズは終了。発災より8日を迎えるまでの今後48時間でASR2の活動を終わらせる。
- ・ カトマンズの17セクターでそれぞれ活動しているチームは、担当セクターのASR2活動が終了しだい地方への展開が求められる。重点地域はSindhupalchowk（東）、Dhading（西）、Rasuwa（北）の3カ所。各USARチームに選択が求められ、日本は、セクターKの延長上にあるSindhupalchowkを選択。同地域のセクターコーディネータはオランダ（GO）、その下に英（GO）、メキシコとカナダの連合チーム（GO）、スペイン（NGO）、韓国（NGO）、日本

(GO)がぶら下がる見込み。日本は、17セクター中のセクターKの調査活動を終えたあとに加わるということになるが、そこまでのキャパはないと考えており、どこまで対応するかは決めかねている。なお、これら地方展開で期待されるのは、構造評価や医療のニーズなどUSAR活動よりも地域のニーズに対応した課題対応が想定されるが具体的内容は不明。セクターコーディネーションを行っているオランダは、各チームの構造評価や医療等の専門家による混成チームを編成し、地域のニーズに応えた活動を展開するとともに、ネパール政府への技術的なアドバイスを構想。

- ・ 一方で、OSOCCからは48時間経過後までに撤退も考えるようにとのコメントもあり、前者の方針と矛盾している感もある。
- ・ OSOCCの要請により、本日から江崎調整員をチームとのリエゾンとして空港横のOSOCC本部に配置することとなった。

➤ 搜索救助活動

- ・ 本日、カトマンズより東に1時間のサクーにてレッキ活動の結果、9歳児が下敷きになっているとの要救助者通報あり、団長及び3副団長以下2個中隊が12:00 Bo0出発で現場に向かった。現地時間16時までの搜索救助活動(瓦礫除去中心)を実施したが発見に至らず、5月2日も活動継続予定。
- ・ Sindhupalchowkでの活動は移動に3~4時間要するため、野営が基本となる。一方、ネパールへの空輸が極めてタイトであるため、救助チーム用の生活機材不足により野営は不可能な状況であることから、同地域での活動は対象外とせざるを得ない。

➤ 5月1日18時のOSOCC会議の報告

- ・ 昨日まで30チーム程度の出席があったが10チーム程度に減少し閑散としている。
- ・ カトマンズ市を16のセクター分けによりASR2活動を実施中だが、日本が割り当てられているセクターKを含む3セクターが未了の状態では終了。
- ・ 活動地域として新たに指定されたP・S・Tの3セクターのうち、Pセクター(Sindhupalchowk)では、コーディネータであるオランダが小規模セルを設置済みでエリアアセスメントによりダメージを調査中。2,000体の遺体が見込まれるため、同回収への支援が見込まれる。
- ・ 一方でOSOCCからは、土・日曜日(5月2・3日)の48時間の活動に集中するとともに、月曜(5月4日)以降はフライトも厳しい状況になるため、撤収計画の早期実施を示唆。出席チームに対して撤退予定日の情報提出が求められた。
- ・ 本会議にて確定した撤収チームは次のとおり。トルコ2チームは本日撤収済み、日本救助犬協会は4月30日撤収済み。

➤ 5月1日22時現在の各国の撤収予定状況

OSOCCにリエゾンとして勤務している業務調整員より、内部情報として、国際USARフェーズは5月3日8:00に終了するとともに、OSOCCは5月4日(月曜)朝に解体されるとの連絡があった。また、各USARの撤収計画情報は以下のとおり。

- ・ 米国部隊：撤収のための米軍輸送機がカトマンズに飛行中。

- ・ オランダ：5月4日撤収。
- ・ ドイツ：5月2日撤収。
- ・ 韓国：5月7日撤収。
- ・ UAE：5月4日撤収。
- ・ シンガポール：5月2日撤収。

➤ 救助チームの活動期間について

5月8日発、9日本邦着の日程を予定。

3. 被災情報

- (1) 死者数：5,582名
- (2) 被災者数：800万名
- (3) 避難者数：280万名
- (4) 負傷者数：1万1,175名
- (5) 損壊家屋数：全壊13万33軒、部分的損壊8万5,856軒
- (6) 首都カトマンズの空港では混雑が続いている。

4. 隊員の健康状態等

- ・ 隊員の体調については、毎日21時からの全体ミーティングにて医療班から隊員全員の体調確認をしている。
- ・ 体調不良等の報告として、隊員1名が下痢。救助犬1頭が下痢・血便の症状あり。
- ・ 就寝中に蚊に刺される隊員が多いため、各小隊に殺虫剤、蚊よけを配布済み。
- ・ 連日の手作業による瓦礫除去作業が続いており、疲れがたまっているため、5月3日以降は1中隊のみの運用とし、もう1中隊は終日休息に充てることを検討中（隔日交代）。

5. メディア取材対応

前日同様。

6. 明日の活動予定

活動未了となっているサクーでの搜索救助活動を継続予定（2個中隊投入）。

7. その他

今後の活動予定について、カトマンズ市内については5月3日（日曜）までにすべてのセクターがASR2完了となる予定であること、装備機材の輸送が滞っているため、野営を必要とする地方への展開が困難であること、構造専門家不在後は倒壊危険度の高い地域での展開は慎重にならざるを得ないこと、5月3日をもって国際USARフェーズは終了するとともに、主要USARチームは続々と撤収を開始しつつあること等の諸制約を抱えたなかで、いかに隊員の士気を維持していくかが焦点となる。現在は、5月8日に帰国の途に就くことを念頭に具体的な撤収、帰国日等を検討している。

以 上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

5月2日 第5報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
8時05分	幹部 OSOCC 会議に向けて BoO 出発
8時30分	OSOCC 会議
9時35分	1 中隊、2 中隊 BoO 出発
9時40分	幹部 BoO 着、指揮班ミーティング
10時21分	1 中隊、2 中隊 サイト K 着
10時35分	1 中隊、2 中隊 サイト K-4 (サクー) 着
10時40分	1・2 小隊 瓦礫除去開始 3・4 小隊 現地休憩テント設営開始
10時30分	ドッグサーチ開始
10時45分	反応なし、ドッグサーチ終了
11時30分	昨日のサイトにて瓦礫除去作業開始 20分交代で作業
12時00分	他国チームのテクニカルサーチ実施のため、サイレントタイム実施
12時36分	ハイリング
12時37分	テクニカルサーチ。反応なし
12時38分	MM、谷看護師、中野業務調整員、BoO 出発
12時47分	ドッグサーチ開始
12時50分	反応なし、ドッグサーチ終了
13時00分	瓦礫除去作業再開
13時25分	MM 等 K-4 到着
14時00分	大休憩 (1時間)。その間、メキシコチームが建物内のテクニカルサーチ実施
15時15分	1 中隊長、松本業務調整員、ハンドラー3名 K-4 発
15時25分	MM、谷看護師、中野業務調整員、BoO 着
16時00分	1 中隊長、松本業務調整員、ハンドラー3名 BoO 着
16時15分	撤収作業開始
16時30分	K-4 サイト発
16時40分	K エリア発
18時00分	OSOCC 会議 (最後の OSOCC 会議)
19時15分	団長プレス会見及びぶら下がり取材
19時30分	指揮班ミーティング
20時00分	全隊員での食事会
21時30分	全体ミーティング

2. 特記すべき活動

➤ 5月2日8時30分のOSOCC会議の報告

- ・ 内務省のコイラ課長より、下記のとおり発言あり。
 - 各国 USAR チームに対する謝意。
 - オマーンとアルジェリアがヘリを持ってきている。他国でヘリを保有している国は連絡願いたい。
 - 発災から1週間経ち、レスキューフェーズは終わった。今後は、レリーフフェーズへ移行する。
 - 5月3日の正午でOSOCCは撤収する。
- ・ OSOCC 会議は本日 18 時の会議が最終である。
- ・ 団長からは、フェーズの終了について公式声明を出すよう申し入れを行っている。（※ Virtual OSOCC に、5月3日12時 内務省が国際 USAR 支援フェーズの終了声明を发出する旨、掲載あり）
- ・ オランダは5月4日（月曜）帰国する。
- ・ 出席者は昨日 18 時の会議と同規模の 10 団体程度。

➤ 搜索救助活動

4 個小隊を 20 分交代による搜索救助作業を終日実施したが、要救助者発見には至らず。亡くなっていたとしても 9 歳の息子を早く見つけてやりたいと涙ながらに訴える父親を中隊長が介抱する場面があった。気温 35 度に及ぶなかで、重機が入らず、手作業での黙々と続く瓦礫撤去作業は過酷であるが、明日も同サイトで活動を継続する予定。

➤ 5月2日18時のOSOCC会議の報告

- ・ 今回が OSOCC の最終会議となる。明日朝公式に OSOCC は撤収。
- ・ カトマンズ市近郊の各セクターはすべてグリーン（ASR2 終了）となった。日本が担当する K セクターの進捗照会に対し、団長から、ASR2 活動は終了するもご子息が行方不明の状況のまま放置できないことから搜索救助活動を継続するとの説明を行った。アルジェリアチームからは翌日の日本の活動を支援したいとの申し出あり。
- ・ 地方に新設された三つのセクターのうち、オランダがコーディネートする P セクターでは、セルは設立されたが他チームは参加していない。サイトへのアクセスが厳しく、しっかりやるにはエアリフトが必要ではないかとのオランダチームからの発言あり。
- ・ 未確認情報で本日 5 歳児が救出されたとの情報あり（その後、誤報と判明）。
- ・ 本日のデモビ（撤収）報告を提出したのは 10 チーム（詳細確認中）。
- ・ OCHA のフィールド調整支援課（FCSS）課長代行から OSOCC 撤収に際し、各 USAR チームの多大な貢献に対する謝辞。

【実績総計】参加チーム数:76（うち Classified:18）、レスキューメンバー数:2,242名、救助犬:135頭、設置されたセクター数:19、救助者:15名、遺体回収:115名、治療者数:1,107名

3. 被災情報

- (1) 死者数：6,250名
- (2) 被災者数：800万名
- (3) 避難者数：280万名
- (4) 負傷者数：1万4,357名
- (5) 損壊家屋数：全壊16万786軒、部分的損壊14万3,673軒
- (6) 5月1日の医療チームからの報告によると、首都から医療チーム活動予定地のバラビセへの道路状況は思ったほど悪くなく、パブリックトランスポートのバスも通行し、中型のトラック、乗用車、小型バスも可能となっているとのことであったが、5月2日に土砂崩れが発生したとのこと。

4. 隊員の健康状態等

- ・ 隊員の体調については、毎日21時からの全体ミーティングにて医療班から隊員全員の体調確認をしている。本日は特段の異常がある隊員はいなかった。
- ・ 救助犬のうち、アイク号を除く3頭が下痢の症状あり。本日、脱水症状の懸念のある2頭に対し、医療班医師が点滴処置を実施。
- ・ 隊員の疲労を考慮し、5月3日から3個小隊による出動とし、日替わりで1個小隊の休息日に充てることとした。

5. メディア取材対応

連日同様、宿舎にて定例の団長によるプレス会見及びぶら下がり取材を実施。サクーのサイトにも取材複数あり。

6. 明日の活動予定

明日も引き続きサクーにおいて捜索救助活動を実施する。8時30分集合、9時00分出動予定。

7. その他

- ・ OSOCC撤収に伴いリエゾン要員として派遣されていた業務調整員は5月2日夜に本隊勤務に戻った。
- ・ 本日判明した他国の撤収状況
 - 中国（CSAR）：5月3日
 - スペイン：5月1日
 - フランス：5月2日
 - スイス：5月2日

以上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

5月3日 第6報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
9時00分	3個小隊（2・3・4小隊、医療班）Bo0 出発
10時17分	到着した隊より連絡：捜索中の男児のご遺体は昨晚発見されたとの情報を入手
10時40分	3個小隊 セクターK 出発
11時25分	3個小隊 Bo0 帰着、指揮班ミーティング
13時30分	レッキ隊（鳥枝副団長、稲葉副団長、2中隊長、中隊長サポート、構造専門家）Bo0 からゴンガブ（Gongabu）へ出発
13時50分	現場周辺着
14時05分	団長 旧 OSOCC 拠点へ Bo0 発、旧 OSOCC 拠点にて、オランダチームリーダー他との意見交換
15時20分	団長 Bo0 着
16時05分	レッキ隊 ボンガブから武装警察署へ出発
16時25分	レッキ隊 武装警察本部到着
16時57分	レッキ隊 Bo0 到着
17時00分	指揮班ミーティング
18時00分	団長プレス会見及びぶら下がり取材
18時30分	全体ミーティング

2. 特記すべき活動

- ・ 本日は第1小隊の休息日。
 - ・ 各国チームが参集しつつあるなか、ホテルの予約がタイトになってきている。本日から救助チームのほとんどの隊員が相部屋での利用に変更となったが、当面の間、現在滞在中のホテルに滞在可能。
- 捜索救助活動
- ・ 本日休息日の1小隊を除く3個小隊はサクーのサイトへ向け9時に出発。到着後、捜索活動を開始しようとしたところ、付近の住民より、日本隊が捜索中であった9歳児は昨夜日本隊の捜索地域の近隣にて、付近住民によりご遺体が発見され、警察により収容、同日中に火葬されたとの連絡を受けた。同サイトでの行方不明者はこれ以上ないことから撤収を決定、3個小隊はBo0へ帰投後、終日待機とした。
- 新しい活動サイト調査
- ・ サクーにおける活動を終了したことから、新しい活動サイト候補として、カトマンズ市

北部のゴンガブにてレッキ調査を実施。5月1日に米国チームにより生存者が発見された場所であるが、現在、韓国、オマーンが活動を実施中。このエリアは倒壊し傾いたままのビルが多く余震による2次災害の危険度が高いため、活動対象とするかどうか保留中。既にレスキューフェーズは終了しているため、サイト選定にあたっては安全性が確認された地域での活動を原則とする。

- ・ ゴンガブでの調査のあと、レッキ隊はネパール武装警察のオペレーションセンターを訪問、協力が求められるサイト情報の聞き取りを実施。5月4日の朝の同警察の会議結果を待って、具体的なサイト候補があれば提示される予定。

3. 被災情報

- (1) 死者数：6,250名
- (2) 被災者数：800万名
- (3) 避難者数：280万名
- (4) 負傷者数：1万4,357名
- (5) 損壊家屋数：全壊16万786軒、部分的損壊14万3,673軒

4. 隊員の健康状態等

- ・ 隊員の体調については、毎日21時からの全体ミーティングにて医療班から隊員全員の体調確認をしている。軟便を訴える隊員は複数名いるが、感染性下痢ではなく、特段の健康異常と認められる隊員はいない。
- ・ 2日の日報で下痢の報告のあった犬3頭については全頭回復。本日は通常どおり、2頭が出動した。

5. メディア取材対応

18時のプレス会見は4社。前日より減少傾向。

6. 明日の活動予定

武装警察の会議結果を踏まえた協力要請を確認のうえ、サイト選定。適切な要請がない場合はバグタプールでの活動を想定。休息日の2小隊を除く3個小隊は9時までに出勤準備を整えたうえで待機。

7. その他

- ・ 現地調達した発電機10台のうち、1台は医療チームに提供。9台は活動終了後先方政府に供与予定。
- ・ 旧OSOCC拠点敷地に残留していた国際チームはオランダ、シンガポール、マレーシア、UAE、オマーン、スウェーデンと韓国NGO。国連OSOCCチーム(2名)はUAEのテントにて活動していたものの、オランダ、UAE、オマーンは明日ないし明後日に撤収、残留国連チームも明日には退却予定の由。

以上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

5月4日 第7報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
8 時	団長 フジテレビ単独取材
8 時 55 分	レッキ隊 ゴンガブ地区のガネスタン、ヒルトン両エリアに向けて出発
9 時 15 分	ガネスタンエリア着、レッキ開始
9 時 45 分	ヒルトンエリア着、レッキ開始
10 時 50 分	レッキ隊 Bo0 へ到着
12 時 30 分	全体ブリーフィング
13 時 07 分	2 小隊を除く 3 個小隊出動
13 時 21 分	ゴンガブ地区ミトラナガル(Mitranagar)通り到着
14 時 20 分	パスチム・ポカラ・ゲストハウスにて 1 小隊テクニカルサーチ開始、以後、1→3→4 小隊の順で搜索活動。タイ、インドのテレビ取材
14 時 30 分	団長他、旧 OSOCC 拠点にて UNDAC (国連災害評価調整チーム) 要員他との意見交換。その後、団長他はゴンガブの活動現場を訪問し、現状視察及び激励
16 時 45 分	活動終了、撤収準備開始
17 時 00 分	団長定例プレス会見及びぶら下がり取材
17 時 10 分	3 個小隊 Bo0 へ向け出発
17 時 27 分	Bo0 到着
17 時 30 分	指揮班ミーティング
19 時 00 分	全体ミーティング (含各隊員あいさつ)

2. 特記すべき活動

- ・ 本日は第2小隊の休息日。

➤ 搜索救助活動

- ・ 武装警察からの依頼に基づき、ゴンガブ地区のガネスタン、ヒルトン両エリア及びバスターミナル周辺でのレッキ活動を実施、要救助者の確定情報はなかったが、ミトラナガル通りの「パスチム・ポカラ・ゲストハウス」にて搜索活動を実施した。
- ・ 同ゲストハウスは5階建てのうち、1、2階が完全に座屈している。構造評価専門家が定期的に安全確認を行いながら、3階部分の床から2階天井へ通じる穴をあけ、カメラによる要救助者有無の搜索を実施。要救助者の発見には至らず、活動は翌日も継続予定。

➤ 救助チームの活動期間について

- ・ 6 日で搜索活動はいったん区切り、7 日は機材整備・帰国準備・関係省庁のあいさつ回り

等を実施予定。また、ホテルの会議室予約の関係上、6日夕方に機材及びBo0の移動を全隊員で実施予定。

3. 被災情報

- (1) 死者数：7,365名
- (2) 被災者数：800万名（未アップデート）
- (3) 避難者数：3万7,500名（カトマンズ渓谷に58カ所の避難所）
- (4) 負傷者数：1万4,355名
- (5) 損壊家屋数：全壊19万1,058軒、部分的損壊17万5,162軒（未アップデート）

4. 隊員の健康状態等

- ・ 隊員の体調については、毎日21時からの全体ミーティングにて医療班から隊員全員の体調確認をしている。本日は特段の異常なし。

5. メディア取材対応

- ・ 17時の定例プレス会見では6社7名の取材あり。
- ・ 午前中にテレビの取材、午後の現場ではインド及びタイのテレビ局による取材あり。

6. 明日の活動予定

- ・ 5月5日は本日に引き続きゴンガブ地区ミトラナガール通りの「パスチム・ポカラ・ゲストハウス」で捜索活動を実施予定（8時30分出動予定）。同サイトでの活動完了後、隊員はBo0にて待機、16時00分から機材及びBo0の移動を全員で行う予定（ホテルの予約上現在の会議室及び機材置き場の明け渡しを求められており、ホテル内及び駐車場への移動実施）。
- ・ カトマンズ近郊では確定情報に基づく要救助者捜索の要請の可能性はほぼなくなりつつあることから、活動現場での安全性を優先したうえで、引き続き、捜索活動を継続する。
- ・ 5月6日でサイトでの活動を終了、5月7日は機材整備、撤収準備、内務省、外務省及び国際機関への帰国報告、内務省への機材供与手続きを予定している。

7. その他

- ・ 現地調達した発電機10台のうち1台は医療チームで使用。残り9台は救助チーム活動終了後、先方内務省に供与予定。
- ・ 旧OSOCC拠点敷地に残留していた国際チームはシンガポール、マレーシア、UAE、オマーン、スウェーデンと韓国NGO等となった。国連UNDACチーム（1名）はUAEのテントにて活動していたものの、オランダは既に撤収済み、5月5日には残りのチームも撤収、UNDAC関係者は国連コンパウンドに移動予定とのこと。

以上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

5月5日 第8報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
8時34分	第4小隊を除く、3個小隊がゴンガブ地区ミトラナガル通りの「パステム・ポカラ・ゲストハウス」へ向けて出発
8時55分	ドッグサーチ開始、反応なし
9時10分	3→1→2 小隊の交代順(40分交代)で活動開始。サイトを四つの区画に分割、区画4においてダーティー・ブリーチングを開始
10時10分	ヒルトンゲストハウスでのレッキ出発
10時15分	レッキの結果、当隊の活動は実施しないとの判断
11時50分	区画4 ダーティー・ブリーチングを終了。区画3開始。山下副団長タイのテレビ取材
12時00分	定時検査により建物の傾斜角度が2度から3.5度に上昇していることを確認、安全確認と構造評価専門家による建物検査のためいったん活動を中止
12時13分	建物検査を終了、活動継続可能と判断し、活動を再開
12時55分	すべての区画における搜索活動を終了。要救助者の発見に至らず
13時10分	パステム・ポカラ・ゲストハウスでの搜索活動完了、サイトを出発
13時37分	Bo0に到着。16時からのBo0及び機材移動まで待機
16時00分	武装警察本部副長官(Additional Inspector General)へ活動結果報告
16時00分	第4小隊も含む全員により機材の移送(中庭→駐車場)及びBo0の宿舎内移転
17時00分	指揮班ミーティング
17時30分	定例プレス会見及びぶら下がり取材
18時00分	全体ミーティング

2. 特記すべき活動

- ・ 本日は第4小隊の休息日。
- ・ 昨日より引き続き、ミトラナガル通りの「パステム・ポカラ・ゲストハウス」にて座屈した2階部分の全区画の搜索活動を実施、要救助者の発見に至らず同サイトでの活動を完了。
- ・ 他の場所でレッキも実施したが、対応可能なサイトはなし。
- ・ 武装警察本部において副長官へのゴンガブ地区活動結果を報告。活動への謝辞とともに、現時点で当隊の支援が必要なサイトはないとの回答。5月6日に団長による武装警察幹部への訪問予定を約束。

3. 被災情報

- (1) 死者数：7,365名
- (2) 被災者数：800万名
- (3) 避難者数：3万7,500名（カトマンズ溪谷に58カ所の避難所）
- (4) 負傷者数：1万4,355名
- (5) 損壊家屋数：全壊19万1,058軒、部分的損壊17万5,162軒

4. 隊員の健康状態等

前日同様、特に体調不良を訴える隊員はいない。救助犬の体調も異常なし。

5. メディア取材対応

- ・ 定例プレス会見ではNHK1社のみ。ゴンガブ地区の活動現場にてタイのテレビ局による取材が行われ、さらに機材取材の要望あり。

6. 明日の活動予定

- ・ 団長及び副団長が武装警察本部を訪問のうえ、活動結果報告と支援が必要なサイト有無に関する最終確認を行う。
- ・ 第3小隊は休息日、他3小隊は待機予定。
- ・ 5月6日でサイトでの活動を終了、5月7日は機材整備、撤収準備、内務省、外務省及び国際機関並びに日本大使館等への帰国報告、内務省への機材供与手続きを予定している。

7. その他

- ・ 現地調達した発電機10台のうち1台は医療チームで使用。残り9台は救助チーム活動終了後、先方内務省に供与予定。
- ・ 旧OSOCC拠点敷地に残留していた国際チームは5月6日の12時までに撤収することで合意。
- ・ 陸路での通行が不可能なセクターS（Rasuwa）以外の全セクターでの国際USAR活動を終了。
- ・ 支援活動を継続する場合には、ネパール政府と二国間で調整すること。
- ・ 江崎業務調整員は本日より医療チームの一員として活動。FMT（海外医療チーム）調整会議などに参加した。

以 上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

5月6日 第9報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
8時30分	全体ミーティング。以降全員 Bo0 にて待機
10時30分	救助犬展示訓練実施
14時00分	団長定例プレス会見及び機材紹介
16時45分	指揮班ミーティング
17時00分	全体ミーティング（含各隊員あいさつ）
18時50分	在ネパール小川日本大使訪問（指揮班、於公邸）

2. 特記すべき活動

- ・ 本日は第3小隊の休息日。
- ・ 本日、団長は武装警察長官に報告及び支援要請の最終確認を目的にアポイントを調整したが、同長官は首相に随行し地方出張となったため、明日8時のアポイントとした。
- ・ 昨日の武装警察副長官面談時に国際救助チームへの支援が必要なサイトはないとの説明があり、具体的な出動計画はなく、部隊は余震発生や緊急要請等の対応に備え終日待機とした。

3. 被災情報

- (1) 死者数：7,365名
- (2) 被災者数：800万名
- (3) 避難者数：3万7,500名（カトマンズ溪谷に58カ所の避難所）
- (4) 負傷者数：1万4,355名
- (5) 損壊家屋数：全壊19万1,058軒、部分的損壊17万5,162軒

4. 隊員の健康状態等

前日同様、特段の異常なし。

5. メディア取材対応

3社。タイのテレビ局（機材撮影も実施）。

6. 明日の活動予定

- ・ 5月7日は機材整備、撤収準備、内務省、外務省及び武装警察等への帰国報告、内務省への機材供与手続き、帰国隊員のメディカルチェック等を予定している。

7. その他
特になし。

以 上

ネパール連邦民主共和国国際緊急援助隊・救助チーム派遣

日 報

5月7日 第10報

1. 本日の活動

時 間	活動内容
7時26分	団長及び副団長4名 BoOを出発
8時00分	団長及び副団長4名 武装警察長官表敬
9時30分	指揮班ミーティング
9時50分	全体ミーティング
10時00分	団長記者会見 隊員 機材整備、機材移送、BoO撤収開始
11時15分	団長及び副団長4名 外務省局長へ帰国報告
11時50分	団長及び副団長4名 内務省局長へ帰国報告
15時00分	団長及び副団長4名 大使館へ帰国報告
16時30分	団長及び副団長1名 JICA事務所長へ帰国報告
午後	隊員 メディカルチェック及び身辺整理（撤収準備）
17時20分	指揮班ミーティング
17時30分	全体ミーティング（含各隊員あいさつ）

2. 特記すべき活動

➤ 武装警察長官表敬

- ・ サクー及びゴンガブのオペレーションにおいて共同活動を行った武装警察のオンダ長官（Inspector General）への表敬訪問を実施。小川大使も同席。
- ・ 大使から地震災害の犠牲者に対するお悔やみとともに、武装警察のJDR活動への協力への謝意、日本のネパールへの支援内容について説明。
- ・ 団長からこれまでの活動報告と武装警察協力に謝意を表明。
- ・ 武装警察長官は日本が救助隊を派遣し現地で救助活動を行ったことに深い謝意を表明。武装警察も救助活動チームを設立しているが、地震対策において日本の豊富な経験、知識と機材面での協力への期待が寄せられた。

➤ 外務省、内務省帰国報告

- ・ 外務省アリエル・アジア大洋州局長、内務省ダンガル災害管理局长へ帰国報告。
- ・ 団長からこれまでの活動報告とネパールのJDR活動へのサポートに謝意を表明。
- ・ いずれの局長も被害の大きかった3サイト（ダルバール広場、サクー、ゴンガブ）を中心とした救助チームの活動を評価するとともに派遣に対する深い謝意を表明。
- ・ 内務省からはUSAR活動期限の公式な終了宣言の時期については、国内からの支援への期待を考慮したうえでの難しい判断であったとの説明があった。
- ・ 現地調達した発電機9台を内務省に供与し、供与の覚書を書名交換した。

➤ 大使館、JICA事務所帰国報告

- ・ 日本大使館及びJICA事務所において、帰国報告、ネパール政府機関への報告結果及びネパール側からの要望（武装警察からの支援要望）等を説明。

➤ 撤収準備

- ・ Bo0の撤収作業を完了。余った生活資材や携行食等の医療チームへの引き継ぎ等を実施。
- ・ 救助機材一式は空港へ輸送完了。復路の航空貨物スペースには余裕があるため数日以内に本邦到着予定。

3. 被災情報

- (1) 死者数：7,365名
- (2) 被災者数：800万名
- (3) 避難者数：3万7,500名（カトマンズ渓谷に58カ所の避難所）
- (4) 負傷者数：1万4,355名
- (5) 損壊家屋数：全壊19万1,058軒、部分的損壊17万5,162軒

4. 隊員の健康状態等

前日同様、特段の異常なし。

5. メディア取材対応

3社。

6. 明日の活動予定

- ・ 10時に宿舎を出発し、空港へ向かう。

7. その他

29日に収容したご遺体は軍関係者に引き渡しを行っているが、国籍等については、その後情報なし。

以 上

6. INSARAG Post Mission Report

Nepal Earthquake 2015

INSARAG USAR Team Post Mission Report
Japan Disaster Relief Search and Rescue Team (JPN1)
as of June 2015



Submitted by JDR Secretariat on behalf of JDR USAR Team

Mission Summary:

Deployment period: From 26 April 2015 to 9 May 2015

Number of team member: 70 members with 4 dogs

Number of rescued live victims: 0

Number of recovered deceased victims: 1

1. **Team Name:** Japan Disaster Relief Search and Rescue Team (JPN1)
2. **Mission:** Search and rescue assistance to the Government of Nepal for damages caused by the earthquake on 25 April 2015.

3. **Overview:**

At 11:56 (15:11 in Japan time) on 25 April, a 7.8 magnitude earthquake occurred in Lamjung District, approximately 80 km northwest of Kathmandu, followed by 20 large-scale aftershocks. According to initial media reports, 1,400 people were confirmed dead and 1,700 people were injured.

In the capital city of Kathmandu, a number of houses and historical buildings were destroyed and many people were injured. The earthquake also caused extensive damage in wide areas, including an avalanche around climbers' basecamps in Mount Everest, which killed at least 10 people.

4. **Preparation:**

Japan Disaster Relief Search and Rescue Team (hereafter: JDR Team) is the official international USAR deployment capacity of Japan. The political focal point is Ministry of Foreign Affairs (MOFA) and operational focal point is Japan International Cooperation Agency (JICA). Based on the Law Concerning Dispatch of Japan Disaster Relief Teams (JDR Law), Minister for Foreign Affairs makes the decision to dispatch the team and accordingly consults with relevant Ministries/Agencies to mobilize necessary resources. Minister also orders JICA to take necessary procedures to dispatch the team.

JDR Team underwent the INSARAG IER in March 2015, being reclassified as Heavy. Other than its own regular training programs, JDR Team regularly participates in INSARAG trainings, IEC/R classifications and working groups to ensure the preparedness of the team.

5. **Mobilisation:**

Following the request by Nepalese government, the Government of Japan decided to deploy JDR Team on 25 April, 2015.

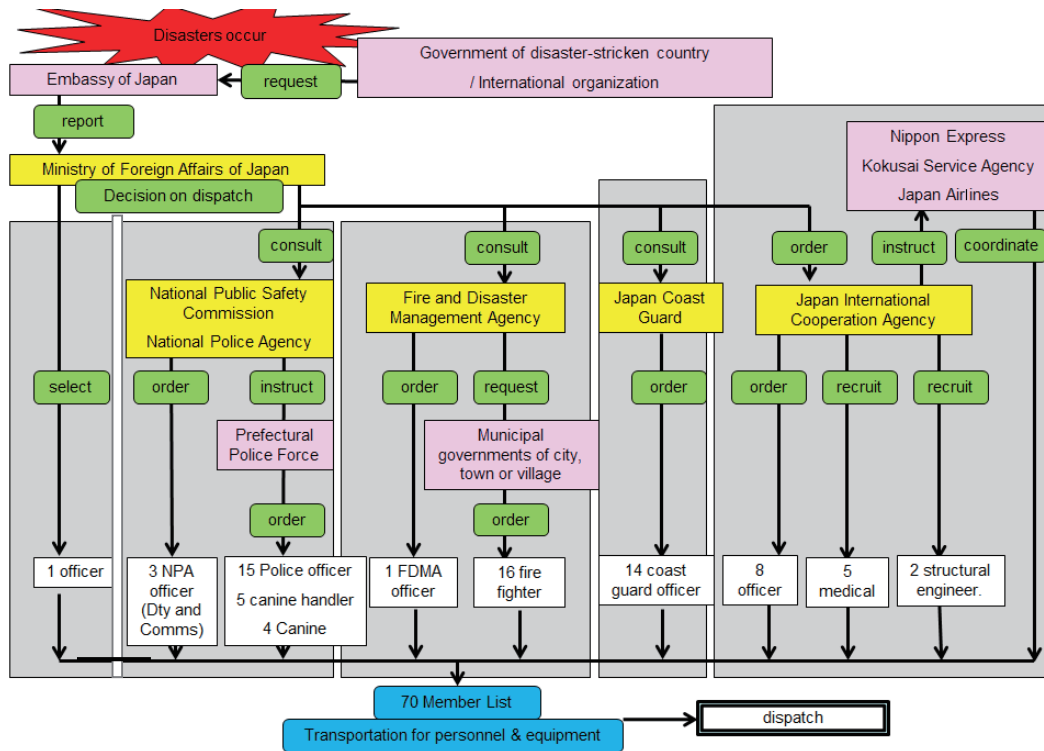
The decision was made by Minister for Foreign Affairs of Japan, based on the bilateral request by the Government of Nepal to provide assistance for search and rescue operations. In accordance to the JDR law, Minister for Foreign Affairs immediately ordered JDR Secretariat, JICA, to start team mobilisation process

including cache mobilisation and flight arrangement. At the same time, the Minister also consulted with relevant agencies including National Police Agency, Fire and Disaster Management Agency, and Japan Coast Guard to mobilise rescuers and canines.

JDR Secretariat mobilised all relevant recourses based on its Standard Operational Procedure (SOP). As the disaster occurred during weekend, the Secretariat made sure all the relevant operational partners, such as Japan Airlines (JAL) and Nippon Express, to be standby prior to the deployment decision so that the mobilisation could be processed without delay. The flight arrangement was completed by 2:35 on 26 April, and time of departure was set at 14:00 accordingly. All equipment and team members arrived at the point of assembly: Tokyo Narita International Airport by 12:20 on 26 April, approximately 2 hours before the planned departure time. Cargos were transported and loaded to the aircraft by Nippon Express based on the MOU.

After inaugural meeting and final confirmation of equipment loading, the Team departed Japan by chartered aircraft of Japan Airlines (JAL) at 17:52, even though there was some delay at the airport.

The Team travelled to Kathmandu, having transit and change to commercial flight at Bangkok Suvarnabhumi International Airport (BKK airport), Thailand as direct flight to Kathmandu was not available at time of deployment by JAL. Due to the limited landing capacity of Kathmandu International Airport, the Team arrived in the country at 11:44 on 28 April, with 24 hours delay from the planned arrival time.



Team deployment procedure

Timeline of Mobilisation (planned departure: 14:00, 26 April)

Arrangement	Time of completion
Deployment Decision	23:50, 25 April
Request for logistic arrangement to JICA Nepal Office	00:10, 26 April
Flight arrangement (JAL chartered aircraft)	02:35, 26 April
Confirmation of all deployment members	08:25, 26 April
Cash arrangement	11:00, 26 April
Team member mobilisation	11:15, 26 April
Cache mobilisation	12:20, 26 April
Medical check	12:20, 26 April
Custom procedure of controlled substance (ketamine)	12:45, 26 April
Inaugural meeting	13:20, 26 April
Actual departure	17:52, 26 April



Inaugural Meeting



Departure



Team Meeting in the chartered aircraft



Transit at BKK airport

6. Operations:

Summary of Operation:

During its operational period, the Team conducted assessment and search in Kathmandu, Thimi, Baktapur, Sankhu, and other eastern areas outside of Kathmandu. As a result, the Team recovered one deceased victim at Krishna Mandir Temple, located in Durbar Square in the center of Kathmandu.

6-1. Coordination with LEMA:

While the International USAR coordination was primarily run by USAR Coordination Cell (UCC) and Nepalese Army, the Team also communicated with Armed Police Force (APF), who was continuously engaged in locating victims and body recovery. The Team was requested to locate deceased victims before the APF would start clearing debris by heavy machineries as it was culturally unacceptable to damage deceased bodies by no means.

The Team operated in Kathmandu area to locate deceased victims and partially clear up the debris so that the APF were able to accelerate installing heavy

machineries during the whole mission.

6-2. Coordination with OSOCC:

The Team liaised with USAR Coordination Cell (UCC)/OSOCC throughout the mission. The team started monitoring Virtual OSOCC (VO) right after the disaster, and kept updating operational information by the Team or JDR Secretariat. The Team continued monitoring VO during the travel either by themselves or through the Secretariat.

Upon arrival in Nepal, the Team registered at RDC with its updated Factsheet and received briefing by UNDAC. Also, during mission, the Team participated in every team leaders meetings and used virtual OSOCC to follow communication and operational updates in order to maintain close communication with OSOCC and UCC. The Team operations were also decided and managed according to the international USAR Coordination, and conducted ASR2 as requested by UCC. The progress and outcome were timely shared by VO as well as team leaders meetings.

The Team also provided one UNDAC trained OSOCC support/liaison officer to UCC upon the request by UCC leader on 30 April when UCC set out Sector coordination structure as USAR operation expanded outside of Kathmandu valley. The officer operated at UCC for two days, from 1 May to 2 May, engaged mainly in administration, organising the layout and prepare materials for team leaders meetings. The officer stayed at BoO of Dutch team along with the other liaison officers from USA.



Receiving briefing at RDC at arrival



Team Leader at UCC Meeting

6-3. Cooperation with other teams:

- i. Japanese NGO Teams

The Team communicated with those Japanese NGO teams on the ground so that all teams are involved in USAR coordination and updated with operational information.

ii. Sweden (MSB)

As FMT Coordination Cell (FMTCC) requested UCC to provide support for FMT coordination, the Team sent an UNDAC trained liaison officer to FMTCC from 5 May to 9 May. MSB, who was the first to respond to the request, and JDR jointly led setting up of FMT coordination cell at Ministry of Health and Population (MOHP) along with the cooperation of UNDAC, WHO, and MOHP.



Working with MSB to set up FMTCC

6-4. Base of Operations (BoO):

The Team stayed at Everest Hotel during the mission, even though the team carried necessary equipment to set up BoO based on its SOP. The team decided to stay at the hotel for following reasons;

i. Safety of the building was ensured

JICA Nepal Office, prior to the arrival of the Team, reserved the rooms and other facilities necessary to accommodate the team and caches at the hotel, where JICA Office had set up temporary office as the Office building was damaged by the earthquake. When the Team arrived, the structural engineers thoroughly assessed the building conditions and confirmed the safety. The engineers also set up evacuation plan including evacuation point just in case the building would be further damaged by aftershocks.

ii. Relevance to the team operation

The Team confirmed at team leaders meeting that the operation would take place around Kathmandu area. The hotel is located near the centre of the city;

therefore the appropriate location considering the operational condition and access to UCC.

Staying at hotel provided the Team with security, electricity and communication for its operation. Also, the place had enough space to set up decontamination and canine areas, which were standard requirement for the Team' s BoO.



Arrival at BoO



Decontamination setup



Command Area



Equipment Maintenance

6-5. Team Management:

The team management consists of Team Leader (MOFA) and four Deputy Team Leaders for respective object (Recording and Media, Planning, Safety and Security, and Logistics and Liaison). Decision making and command is also supported by Medical Manager, logistics, and communication officers. During the deployment, the Embassy of Japan and JICA Nepal Office also contributed to team management as liaise with local authorities and home base.

6-6. Logistics:

Operational logistics arrangement on the ground was initially managed by JICA Nepal Office, following the JICA standard procedure to accept JDR teams. JDR Secretariat, once the team deployment was decided, sent official request to the JICA Office to arrange necessary items for the team operation such as transportation, oil, and gasoline. By the time of team arrival, the Office had prepared hotel, local interpreters (Japanese-Nepalese), transportation (trucks and vans, and buses), and drivers. The Office also prepared extra amount of food and water to make sure the self sufficiency of the Team. During the mission, the Team logistics officers were in charge of managing these resources as well as team equipment.

6-7. Search:

ASR 2/5 at Durbar Square:

The Team received a request from the Government of Nepal to assist their rescue operation led by the Nepalese Army in Durbar Square on 28 April, and the Team started its activity immediately. The Team recovered one deceased body at Krishna Mandir Temple on 29 April. The Team used canines and technical search equipment to locate victims, and used hands and hand tools such as shovels to remove debris not to harm the victim. The operation ended on 30 April after completing search and the Team handed over the site to the Nepalese Army. The INSARAG Victim Extrication Form for this victim was filled by Medical Manager, then submitted to UCC at the following team leaders meeting

Area Assessment (ASR 2):

From 29 April to 2 May, the Team conducted ASR 2, assigned by UCC. The Team operated in sector K, the eastern side of Kathmandu including a part of Baktapur and Sankhu. The Team used both canines and technical equipment to search possible trapped victims. All the assessment results were reported to UCC, who accordingly informed the Government of Nepal. The reporting was properly done by using INSARAG Worksite Triage Form.

Search assistance to LEMA:

Besides conducting ASR2, the Team conducted search operation in Sankhu for 2 days (1-2 May), following the request by local authority to locate nine year old

victim who was presumed to be trapped in the rubble. The Team used canines and technical search, however, the boy was found dead by APF in the vicinity of the Team's operational area in the night of 2 May.

From 3 May to 5 May, the Team conducted search operations in Gongabu and its surrounding areas on the request by APF, in order to confirm no body was trapped in the remaining buildings where they were going to remove debris by heavy machinery. Besides conducting both canine and technical search, the Team also removed debris where necessary in order to confirm that no one was left in the rubbles.

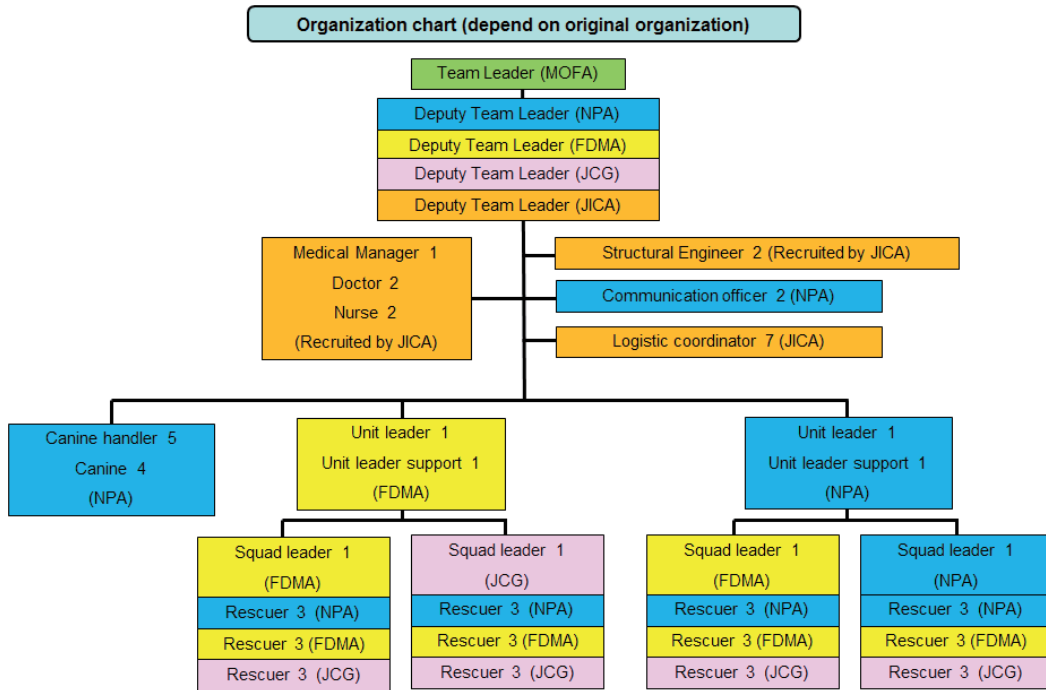
6-8. Rescue:

The Team did not perform live rescue operation.

6-9. Medical:

The Team had one Medical Manager (doctor), two doctors and two nurses. The medical unit is responsible for monitoring team members' health as well as treatment of victims.

There was no major medical operation taken place. Medications and health counselling was provided to some rescuers who claimed diarrhoea or minor injuries. Beside the Team, the medical unit provided medical care to local rescuers, who had been injured from rescue operations. Medical Manager conducted health check of UNDAC members at RDC when being informed that one of the UNDAC members was feeling ill. The Medical Manager also provided infusion to two canines, which were suffering from severe dehydration due to stress.



Team Structure



Body Recovery



ASR 2 in Sector K



Technical Search to assist locating
victims

Medical care to canine

Japan Disaster Relief Team operation timeline

Date	Event
26 April	Team Mobilisation and departure
27	Transit at Bangkok, Thailand
28	11:44: Arrival in Nepal and RDC reporting 15:10- Operation at Durbar Square 18:00: Team leaders meeting
29	All day: Operation at Durbar Square (cont') 08:00: Team leaders meeting (assigned ASR2 in sector K) 10:30- : ASR2 in sector K 15:15: Victim extrication (deceased) at Krisha Mandir 18:00: Team leaders meeting (reporting)
30	All day: Operation at Durbar Square (cont'), ASR 2 (cont') 08:00: Team leaders meeting (LEMA announcement of ending the USAR phase) 18:00: Team leaders meeting (LEMA announcement of entering ASR5)
1 May	All day: ASR 2 (cont') 08:30: Team leaders meeting (UCC requested for team liaison to INSARAG teams) 08:58-: Operation in Sankhu 12:00: JDR provided team liaison to UCC 18:00: Team leaders meeting (reporting)
2	All day: Operation in Sankhu(cont') ; ASR 2 (cont') 08:30: Team leaders meeting (Advance announcement of end of international USAR phase) 16:15: Completion of ASR2 in sector K 18:00: Last team leaders meeting (Announcement of UCC closure)
3	All day: Operation at Gongabu area (cont') Official announcement of ending international USAR phase
4	All day: Operation at Gongabu area (cont')
5	Operation at Gongabu area (cont'); completed at 13:10 16:00: Operational reporting to Armed Police Force
6	All day: Standby at Base of Operations

	18:50: Team command reporting to Ambassador of Japan
7	All day: Team command reporting to LEMA (Armed Police Force, Ministry of Foreign Affairs, and Ministry of Home affairs) 11:00 - 17:00: Preparation for Demobilization
8	13:55: Exit from Nepal

7. Demobilisation:

Demobilisation took place on 8 May. The demobilisation decision was made by the Government of Japan, considering the operational situation and the Nepalese government's declaration on the end of International USAR phase. The team usually uses commercial flights to return to Japan, sending caches with available flight, not necessarily with the team. JDR Secretariat reserved the Thai Airways for the return flights, transferring at Bangkok airport, leaving Kathmandu at 13:30 on 8 May. The Team shared its demobilisation plan, using INSARAG Demobilisation Form and INSARAG Mission Summary Form, on VO prior to the departure as requested by UCC before its closure. The Team visited and reported its demobilisation also at RDC at Kathmandu airport upon departure.

Prior to demobilisation, logistic officers arranged a local veterinarians visit to Everest Hotel in order to issue health certificates for canines, which was required for export canines from Nepal and import them to Japan. The procedures were done by logistic officers and JDR Secretariat before leaving the country without delay.

Two officers out of 70 members continued to stay in Kathmandu after the demobilisation. One logistics/liaison officer was merged into JDR Medical team, which was operating at the time, to assist FMT coordination and team liaison. The other logistic officer stayed closely and worked with JICA Office to jointly arrange cache transportation.



Team leader submitting operational report to LEMA before departure from Kathmandu

8. Lessons Learned

- i. The experience of participating in INSARAG exercises and advantage of having IEC classifiers in the team helped the Team to engage in international USAR coordination including UCC, as the Team has been updated with the latest INSARAG rules;
- ii. IER experience helped to enhance team performance, cache management, and confirming necessary procedure/documents to deploy;
- iii. ASR Marking should not be done on historical/preserved buildings. The Team conducted ASR 2 at Hanuman Dhoka, one of the World Heritage Sites. The Team used wooden boards/water proof papers to display the markings so that the buildings could be protected.
- iv. Depending on the landing capacity of airports in affected country, team capacity and caches should be flexibly adjusted while maintaining INSARAG standard in order to avoid delay in arrival and operation. The Team is currently undergoing prioritisation of cache transportation in case of facing similar challenges in future,



Avoiding direct marking to preserve the historical building

9. Recommendations:

- i. To promote INSARAG Guidelines to non INSARAG classified teams to ensure all international teams use the same marking and report to UCC
- ii. To continue INSARAG Regional Exercise. It is one of the best opportunities for teams to get familiar with UCC and team management of other teams.
- iii. To continue strengthen capacity of affected countries in receiving international teams as well as preparedness through INSARAG exercises and capacity building.

10. Provider of information:

Shigenobu Kobayashi

Team Leader

Humanitarian Assistance and Emergency Relief Division

International Cooperation Bureau

Ministry of Foreign Affairs

Email: shigenobu.kobayashi@mofa.go.jp

TEL: +81 3 5501 8359

Makoto Yamane

Deputy Team Leader

Secretariat of Japan Disaster Relief Team

Japan International Cooperation Agency

Email: Yamane.Makoto@jica.go.jp

TEL: +81 3 5226 6494

Haruka Ezaki

Logistic/Liaison Officer,

Secretariat of Japan Disaster Relief Team

Japan International Cooperation Agency

Email: Ezaki.Haruka@jica.go.jp

TEL: +81 3 5226 6583

11. Contact details:

Noriko Suzuki,
INSARAG Operational Focal Point
Director General,
Secretariat of Japan Disaster Relief Team
Japan International Cooperation Agency
TEL: +81 3 5226 6584

Abbreviations:

APF	Armed Police Force
MOFA	Ministry of Foreign Affairs
JICA	Japan International Cooperation Agency
JDR	Japan Disaster Relief Team
JDR Secretariat	Secretariat of Japan Disaster Relief Team
NPA	National Police Agency
FDMA	Fire and Disaster Management Agency
JCG	Japan Coast Guard
NPA	National Police Agency

